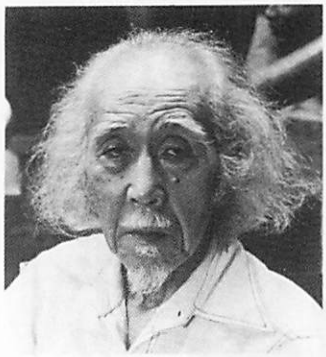
平沼桐江居士夫妻
作品集

発刊によせて

芸術院会員　彫刻家
澤田政廣



私が平沼彌太郎先生におあいしたのは、昭和二十三～四年のことで私の五十三～四才の頃の事である。私は木彫家として、三木宗策先生の弟子（おとうとでし）として全くほんとうの兄弟のような交りをしておった。其の頃三木先生のもとに平沼さんがお弟子入りして私も一度、三木先生のお宅で、お目にかかった記憶があります。

其の頃三木先生は、木彫界のホープとして活躍されておりましたが、残念な事に、世界戦争の終りと同時に、たしか五十三才の若さで病死されてしまいました。

平沼先生は、御両親の菩提を弔らう念願から、三木先生に師事して聖観音、梵天、帝釈天、地蔵尊等を彫り、持山の中腹にお堂を建て、次に仁王門を計画され先ず祖先の植えおかれた檜の大木を切り出し一丈余の仁王尊の彫刻に打ち込まれたのであります。

ところが不幸にも三木先生の突然の死により一大支障をきたしたのであります。

そこで或日突然私の家に平沼先生ご夫妻がおみえになり、実はご承知の通り三木先生の不慮のご他界により、仁王尊彫刻が未完成にて途方にくれておりますゆえ、是非とも私に三木先生にかわって力をかして下さいとのお話でしたが、まだまだ私如き未熟者には其の人ではないと辞退いたしましたが、たってのお話でありましたので、三木先生のあとを、引きつぐ事になり、お山のアトリエに参上致し仁王様を拝見いたしましたところ、も早や大体出来ており、全く初めて木彫仏の丸彫りにてしかもじか彫りにて丈余の仁王尊像を立



故・三木宗策氏　桐江が手がけた最初の仏像彫刻（聖観音、梵天、帝釈天）の制作に際して大いに指導、助言を与えた良き師であり、また沢田政広の兄弟子でもある（文・帝展審歴任、木彫家）一八九一～一九四五年。第二次世界大戦の傷あとの未ださめやらぬ昭和二〇年、五三才の若さで世を去った。

（写真は在りし日の三木宗策）

派に彫り上げて、其の立体観といい豊かな肉づけの精気ある姿には、暫くの間、私も息づまって言葉も出ないしだいでした。これならいけると私も安堵いたし、気づいた所をなおして、たしか二年目に完成いたしました。そしていよいよ彩色にとりかかる事になり、日本画家小川潮人氏に手伝ってもらいましたが丁度寒中大雪の日で山中吹きさらしの仁王門の櫓の上で鼻水を流し乍ら彩色をしつづけた記憶がなま〳〵しく残っております。其後平沼先生は社会的には埼玉銀行の頭取として斯界に雄飛し又参議院議員として政界に飛躍して其のかたわら数百町歩の山林を維持して家を守り其の山中へ、世人の想像もつかぬ夢のような仏の殿堂を次から次へと建設されており、これこそ日本の国土へ昭和時代の、国宝を残す歴史的な仕事であります。私もそのお手伝いの出来たことを大切に思っております。



十一面観音（本堂七観音の内）沢田政広・作

はじめに――白雲山鳥居観音の由来

白雲山鳥居観音開祖　八十六翁
平沼桐江



亡母信行院（俗名しげ）は非常に観世音菩薩の信仰篤く、毎月十七日には近所の人々を集めて観音経をあげ茶菓を供して一夜を語る事を無上の喜びとしておりました。そして私に観音堂を建ててくれるようにと常々申しておりまして建立の場所等、母と共に歩き回り最後に只今の恩重堂の所が良いと決めました。母の死後、賽銭箱を開けてみましたところ、一厘銭、五厘銭等にて七十何円かの貴重な浄財がありましたので貯金にしておきお堂建立の基金にしました。

その後、日支事変が始まり大東亜戦に発展して世情騒然の中、歩兵中尉でありました私は、何時応召があるかわからない状勢となりました時、母の遺言が稲妻のように私の心を打ち、もしお堂を建てずに出征して戦死でもしたら母にあわせる顔がないと思い大急ぎで観音堂を建てようと決心致し、出来る事なら御本尊を自分で彫りたいと思いました。

お堂建築は中里清五郎先生にお願いしましたが、ご本尊の観音様はまだ彫った事がありませんのでお寺や博物館等にて一生懸命研究しておりましたところ、幸い帝展（現日展）に彫刻の大家　三木宗策先生の聖観世音菩薩の素晴らしい作品が出品されておりましたので、早速先生に懇願して弟子となり粘土から始めて勉強いたし、昭和十五年四月、聖観世音とお脇立の梵天、帝釈天を完成して曹洞宗管長　鈴木天山猊下ご親修のもとに開眼式を挙行する事が出来まして実に感無量でございました。

その後、県森連や木材統制会社その他銃後の仕事に追われ、終戦後は参議院議員、埼玉銀行頭取等多忙を極めておりましたが、同時に仁王尊、地蔵尊を始め七観音、救世大観音といろいろ制作を重ね目下鐘楼と三十三観音を制作中であります。

そして三木先生のあと幸いに斯界の巨匠　沢田政広先生に師事する事が出来又、その他多くの諸先生方の御指導、御助力により鳥居観音も四十年余にして只今のような信仰と健康の霊場として四季を通じて多くの人々の参拝が絶えませんことは、亡母が私に常時つきまとい補導された賜物と信じ感激に堪えません。

又、白雲山の寺領として十万坪の山林を提供出来ました事は祖先のお蔭と感謝しております。

尚、これ迄に御恩を蒙りました諸先生の御尊名を左記に掲げて感謝のしるしと致します。

木彫　　彩色

故三木　宗策先生　　故小川　潮人先生
沢田　政広先生　　磯貝　勝之先生
中村　博直先生
宮本　光庸先生　　壁彫　壁画
矢野　秀徳先生　　故児玉　希望先生
村岡　久作先生　　奥田　元宋先生
故石原　昂　先生　　故野生司香雪先生
福士　勝男先生　　其他

諸先生各位御愛
合掌　多謝

雅号　桐江の由来

私の雅号「桐江」は故水野梅暁老師が私の釣好きをみて厳子陵の詩から選んだものです。

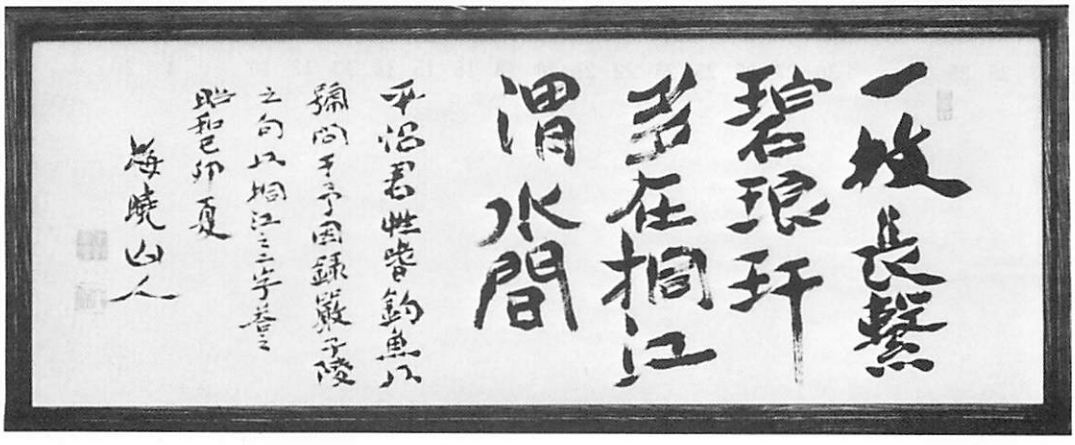
一枝長繋碧琅玕　多在桐江渭水間　楊柳陰中驚鯉躍　蓼花香裡伴鷗眠　未看使者重徴聘　幾見漁翁独往還　長占煙波与風月　此生贏得出塵喪

桐江は楊子江の支流です。

子陵は光武帝の招きに応ずる気持はなくいつも桐江か渭水のあたりに釣糸をたれています。

そして柳の蔭で鯉の跳ねる音に驚いたり蓼花の香り漂う中に寝ておりますと鷗は傍らに来て共に眠ります。

使者は遂に来たらず彼は悠々と釣魚を楽しむことが出来て軽いびくを抱え夕陽を背に往還する姿は超然として物外に遊び、天地と一枚になっております。



平沼桐江居士夫妻作品集

目次

発刊に寄せて　沢田政広 …… 2
はじめに　平沼桐江 …… 4

作品I

聖観世音菩薩 …… 10
如意輪観音 …… 12
不空羂索観音 …… 13
准胝観音 …… 14
馬頭観音 …… 15
千手観音 …… 16
仁王尊 …… 18
救世大観音 …… 20・24
阿弥陀如来 …… 21
吉祥天 …… 22
不動明王 …… 23
四天王 …… 25
薬師如来・日光・月光菩薩 …… 26
十二神将 …… 27
三十三観音 …… 30

作品II

本堂 …… 34
玄奘三蔵塔 …… 35
納経塔 …… 36
玉華門 …… 37
救世大観音堂宇内 …… 38
地球愛護平和観音 …… 40
本堂内陣天井及壁面 …… 42
観音三十三応身 …… 48
観音眷属二十八部衆 …… 49



自刻像

玄奘三蔵法師像 50
玄奘三蔵塔前大香炉 51
大黒天 52
子育地蔵尊 53
印度式釈迦如来 54

作品III

龍頭・巌観音 56
印度舞踊 57
小観音彫刻像 58
その他　鳥居文庫所蔵物 59

とみ作品

扁額　聯・写経・鎌倉彫作品 64

概説

生家と生いたち 70
学徒から林業へ
多忙をきわめた公務
観音郷づくり
母の遺言、観音堂建立
師を求めて
仏像彫刻への道
桐江の伴侶・とみ
地蔵堂縁起
仁王門　本堂建立
本堂の仏像たち
本堂増築　文庫設立
玄奘三蔵塔建立
大観音建立
納経塔・平和観音建立
三十三観音・鐘楼建立

表・裏表紙　大観音堂宇内に祀る一万体観音

作品 I

桐江が母の遺言を履行しようと、白雲山境内に観音堂を建てようと考えていた昭和一〇年頃、信仰心の目覚めとともに仏像彫刻の制作に入る。そして師を求めて三木宗策に弟子入りし、死後、沢田政広、その他、諸先生方などにも協力を得て桐江は仏像彫刻の道を歩み続けた。

こうして彫刻を始めて四〇余年間の作品の大作は、ほとんど白雲山境内に祭祀され、今、その作風の経緯をしのぶことができる。



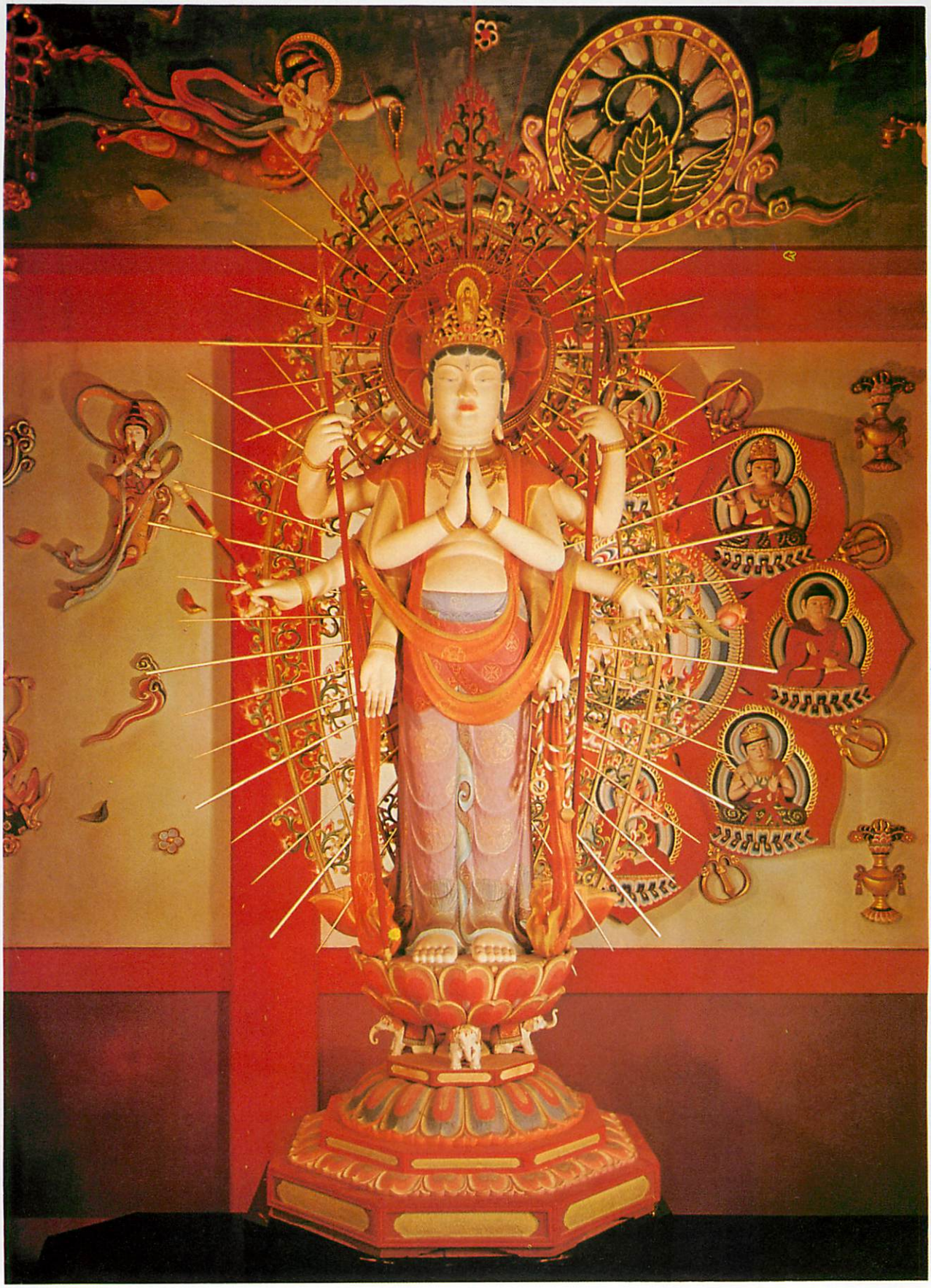
聖観世音菩薩　（部分）　鳥居観音本堂御本尊（七観音の内）、あらゆる観音の根本をなすものということで、聖の文字が冠されている。



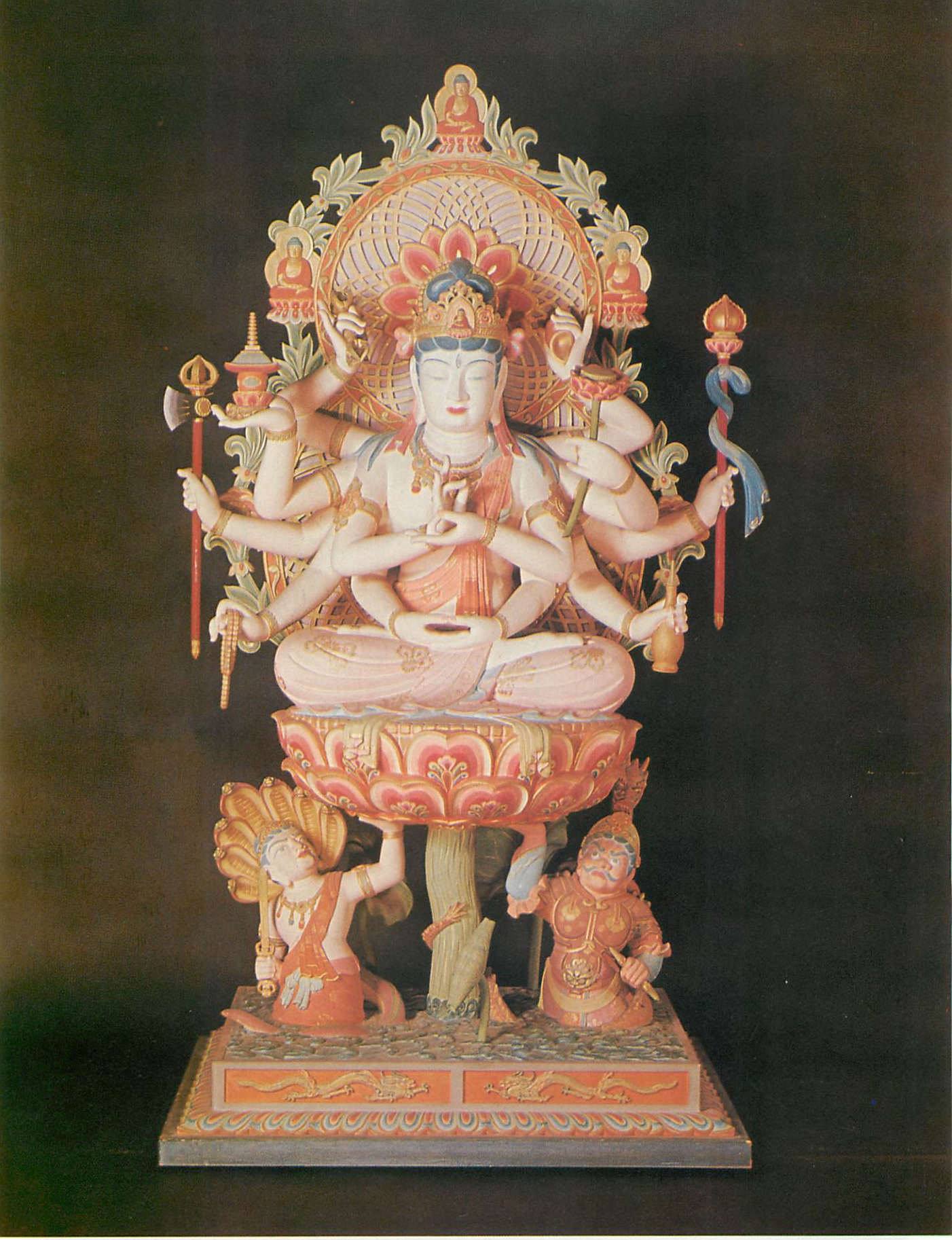
11 **梵天** 木彫 総高 0.9m 聖観音脇侍仏 昭、15　**聖観世音菩薩** 木彫 総高2.3m 昭、15　**帝釈天** 木彫 総高0.9m聖観音脇侍仏昭、15



如意輪観音　木彫　総高 2.8m　昭、30（七観音の内）　仏像の尊厳を傷つけない程度に現代感覚を生かそうと、当時流行の水玉模様を彩色してある。



13 **不空羂索観音**　木彫 総高 3.85m 昭、32（七観音の内）三眼八臂で合掌の間に宝珠を持っている。不空とは「衆生の心願空しからず」の意。



准胝観音　木彫　総高 1.5m　昭、35（七観音の内）准胝観音はたくさんの仏の母である。桐江は亡母を思い出しながらこれを彫った。



15 **馬頭観音**　木彫　総高 1.5m　昭、33（七観音の内）台座が三頭の馬頭からなっているのは桐江の工夫である。



千手観音（部分）　桐江作の多くの仏像には体内物が収められているが、この千手観音体内にも写経・体内仏を含む種々の品が収められている。



千手観音　木彫　総高3.9ｍ　昭､42（七観音の内）手の数42本、最も複雑な工程を経た力作、金箔仕上げ。



仁王尊(阿像)　木彫　総高 2.4m　昭、27　仁王像二体とも完成迄に12年間を費したのは、多くの公職を持ち桐江が多忙をきわめたのと戦争の影響だった。



19 **仁王尊(吽像)**　木彫　総高 2.5m　昭、27　阿、吽の呼吸といって口を開いている方は善を開き、口を閉じている方は悪を封じるの意。



救世大観音(部分)　鉄筋コンクリート造　総高(台座共)33m　昭、46　当時、日本で三番目に高い観音像



21 **阿弥陀三尊** 木彫 中央・阿弥陀如来 総高 3.2m 脇侍仏・観音、勢至菩薩 総高、各 2.3m 昭、46



吉祥天　木彫　総高３ｍ　昭､44　頭上には直径2.6ｍの天蓋があり、内面の鐘のモザイク張りにイラン将来の燈籠の光が反映し幻想的な妖しさをかもし出している。



23 **不動明王**　木彫　総高３ｍ　昭､45　台座右に制吒迦童子(1.3m)､左に矜羯羅童子(0.9m)が脇立となっている。吉祥天蓋を配す。



救世大観音　中央・総高(台座共)33m　昭.46　脇仏・総高(台座共)22m　台座(堂宇)床面積197平方m原型を拡大するのに粘土を用い話題をまいた。

四天王　コンクリート製　各総高2.7m　昭、46



広目天　四天王・西の守護神



持国天　四天王・東の守護神



多聞天　四天王・北の守護神



増長天　四天王・南の守護神



日光菩薩　木彫　総高 1.5m　昭、49　　**薬師如来**　木彫　総高 2.5m　昭、49　　**月光菩薩**　木彫　総高 1.5m　昭、49

日光・月光菩薩共に薬師如来の御脇立。薬師如来光背に金箔の梵字が配されている。

十二神将　木彫　総高、各1m前後　昭、49
頭上にそれぞれ子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支を配す。



招杜羅大将(丑像)　総高 1.06m



毘羯羅大将(子像)　総高 1.02m



摩虎羅大将(卯像)　総高 1 m



真達羅大将(寅像)　総高 1 m



因達羅大将（巳像）　総高 0.96m



波夷羅大将（辰像）　総高 0.94m



額儞羅大将（未像）　総高 1 m



珊底羅大将（午像）　総高 0.94m



迷企羅大将（酉像）　総高 1.05m



安底羅大将（申像）　総高 1 m



宮毘羅大将（亥像）　総高 0.84m



代折羅大将（戌像）　総高 0.97m

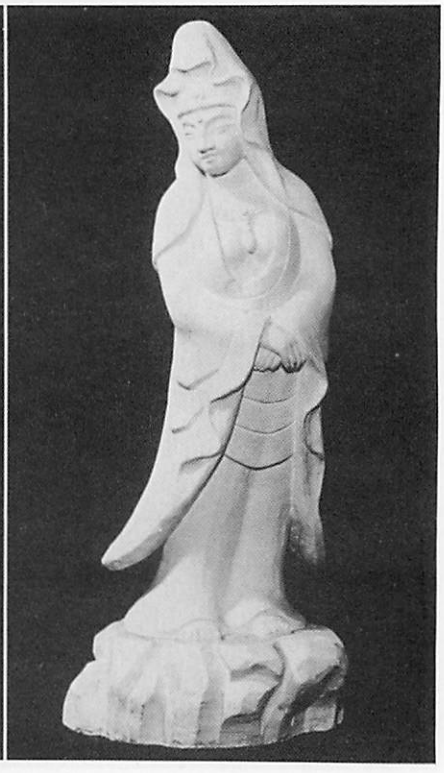
三十三観音　ブロンズ製　総高、各 0.8m前後　現在制作中（掲載してある像は全て石膏原型、他の現在制作中のものに関しては本文77～79頁参照）三十三観音というのはあらゆる必要に応じた姿で、この世に現われて我々を救ってくださるという三十三応身の例にもとずいたもの。桐江はこの大作を52年秋に完成させた。
昭.52



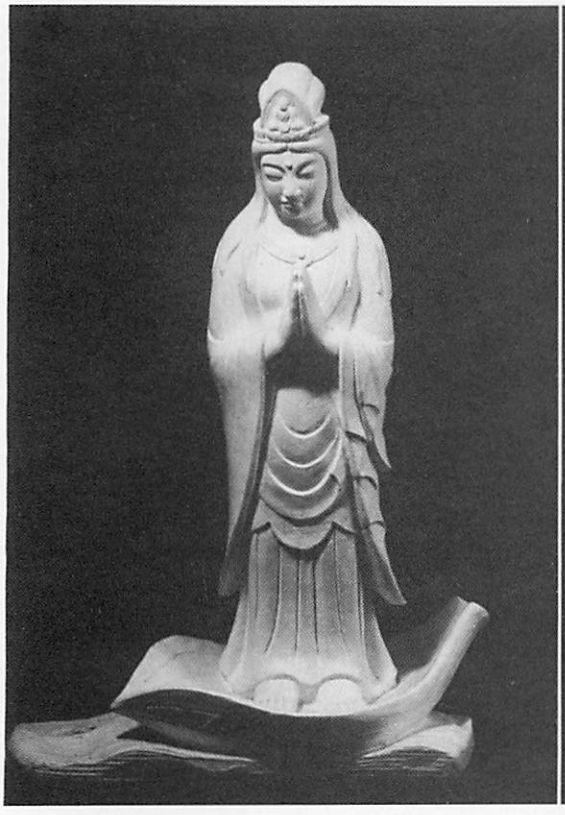
瑠璃観音



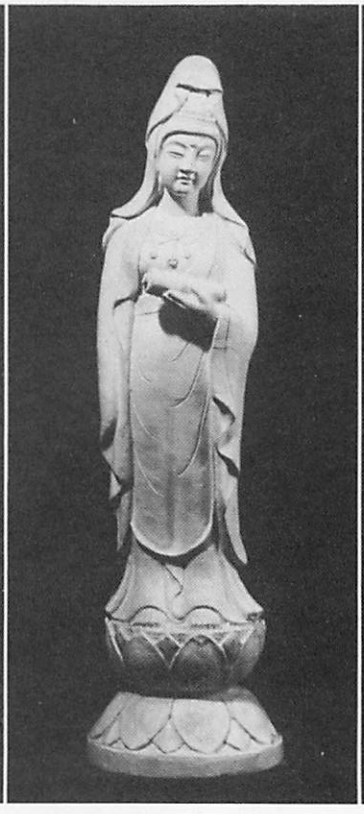
楊柳観音



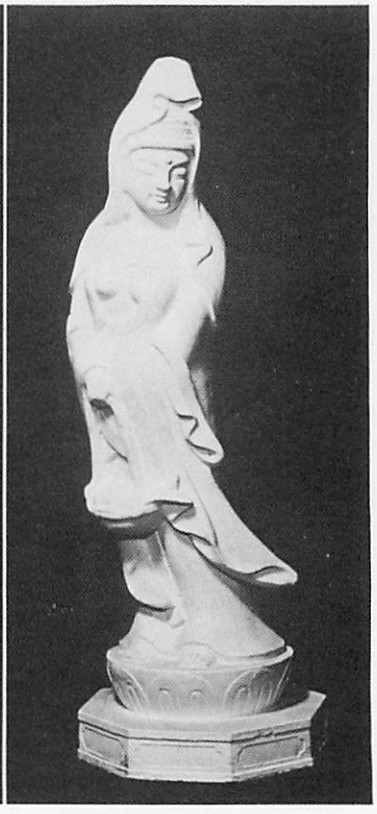
白衣観音



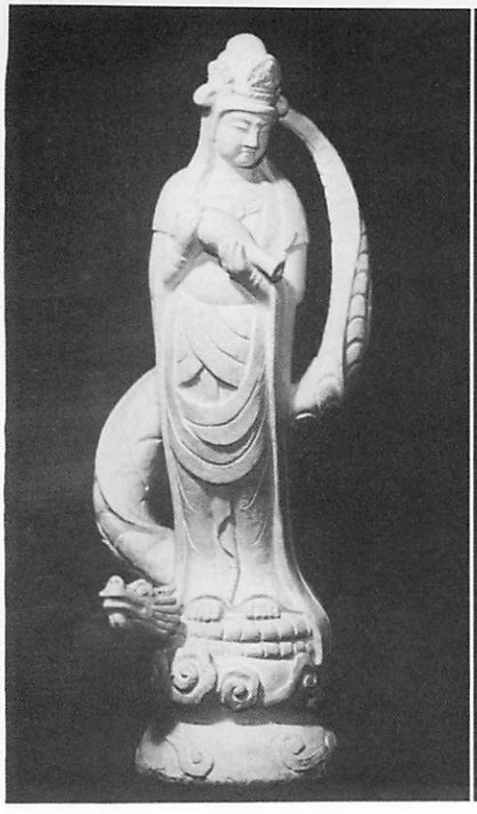
水月観音



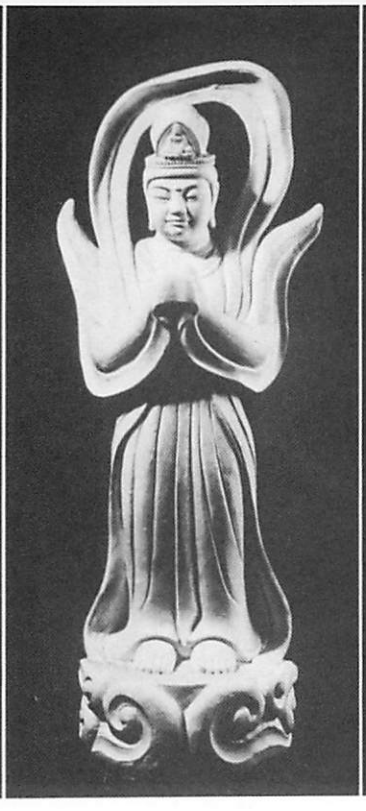
持経観音



魚藍観音



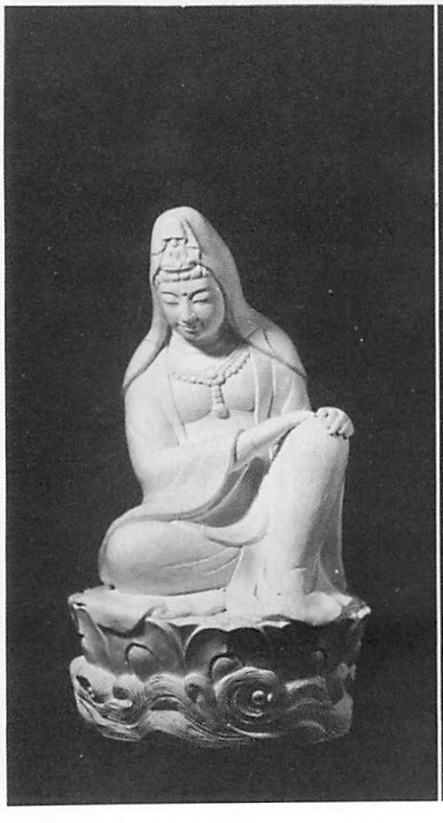
龍頭観音



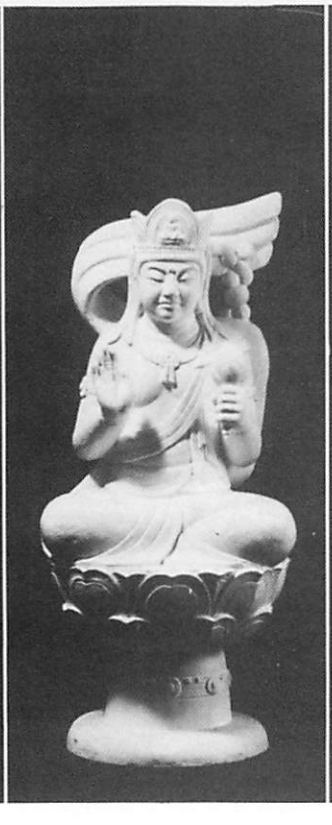
威徳観音



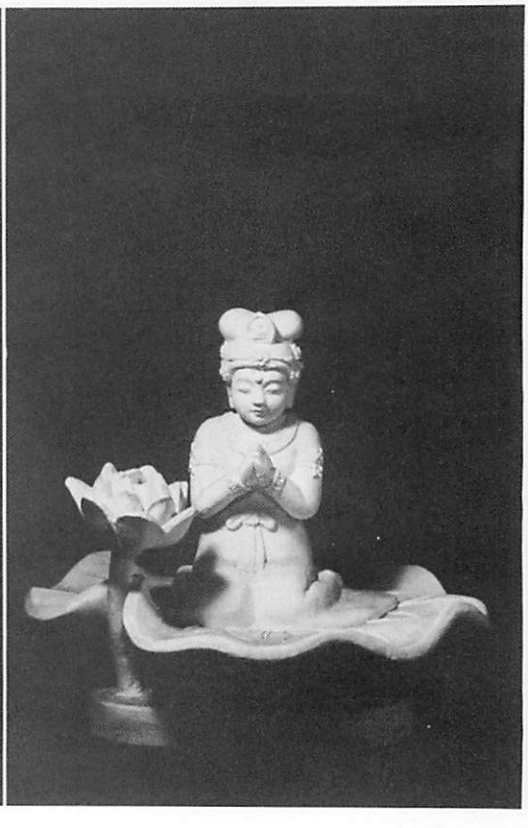
遊戯観音



阿耨観音



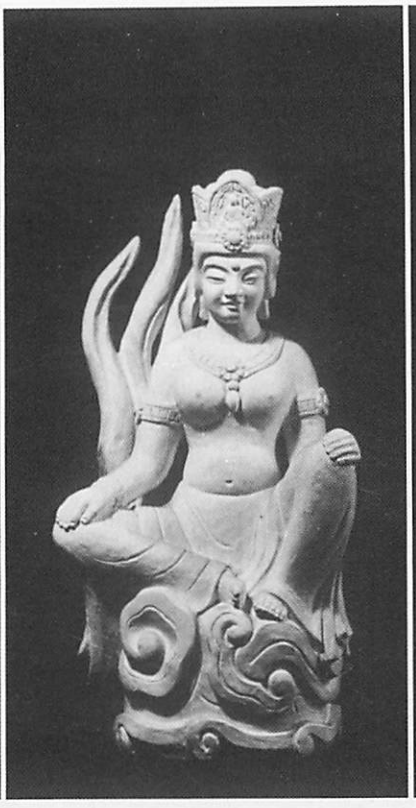
青頸観音



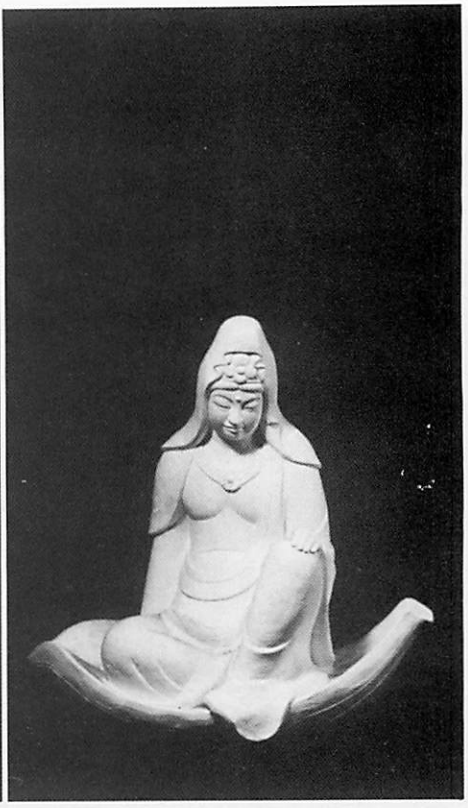
蓮臥観音



蛤蜊観音



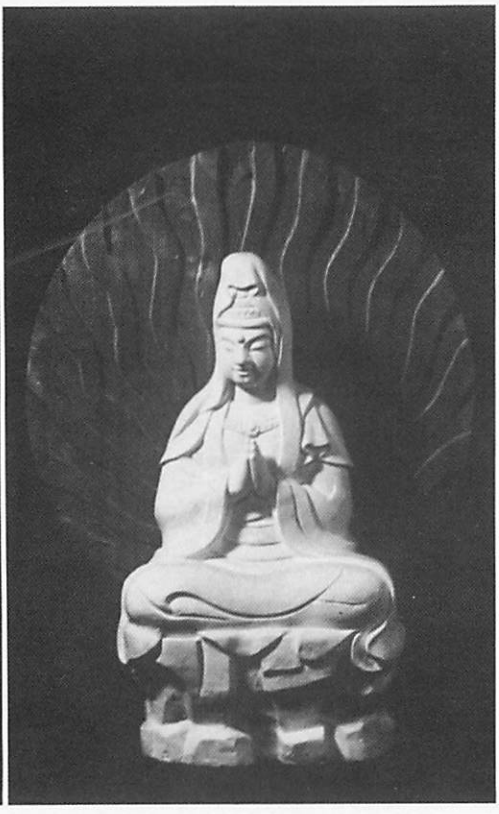
施楽観音



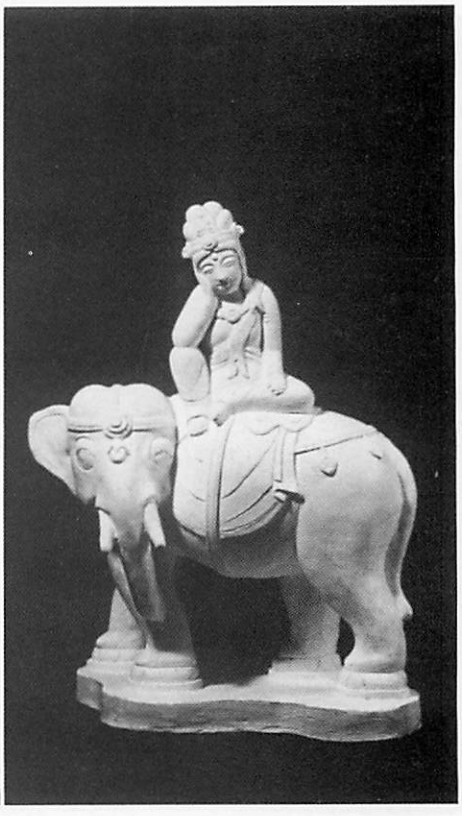
一葉観音



岩戸観音



円光観音



延命観音

作品 II

今日、桐江の思想は具体的な形で見ることができるわけだが、すでに観音堂建立のとき（昭和十五年）に、白雲山境内十万坪に本堂、鳥居文庫、三蔵塔、救世大観音等、次々に生まれていく巨大な鳥居観音構想が、桐江の内部に形づくられていたことは彼以外知らないところであった。

この章は、彫刻家・桐江が遠大な宗教的ビジョンを具現化した白雲山鳥居観音の建造物、彫刻、壁彫等が掲載してある。



本堂　単層入母屋造向拝付本瓦葺き　昭､33完成（99平方m）、昭､42増築（総床面積165平方m）、御本尊聖観音をはじめ七観音が奉安され、外観は飛鳥朝建築様式に現代性を取入れ簡潔なものとなっている。屋根中央にはブロンズ製天女像（沢田政広･作）が、あり、鬼瓦は菩薩の顔を形どってある。また、中央入口ガラス扉には大法輪(小川潮人・画)、四囲の窓には海の幸、山の幸を現代タッチで色彩豊かに描かれている(互井開一・画)。さらに堂内四囲壁面は補陀落迦山の風景が描かれ(野生司香雪・画)、この他、天井画を彩る四季の花が30人の著名画家によって描かれている。



玄奘三蔵塔　鉄筋コンクリート造　総高33m　（地下1階、地上3階、延べ142平方m）、昭、35　出隅付四角形壇上に八角形の柱を建て、1階塔身は隅切八角形で方形屋根が架せられ、中2階中央には堅牢な厨子があり、その中に三蔵法師の霊骨が納められている。各階周囲の壁面には三蔵法師の西域記を「伝経」「受難」「盛儀」「訳経」の四場面にわけて壁画が描かれている（児玉希望・作）2階は八角形の塔身と屋根で仏舎利塔がある。3階は円形塔身に16角形の屋根を架し、全て銅板瓦棒葺き仕上げ。頂上に金色九輪（水煙付）外壁セメント彫刻は日輪を形どり壁面は釈迦誕生図、諸菩薩浄土図（沢田政広・作）基壇四方の彫刻（邪鬼）は深山の猛獣、深海の魚族を神格化した独創的なものとなっている。



納経塔　鉄筋コンクリート造　総高15m　昭、48　この塔は、今から2000年前、ガンダーラの遺跡から掘り出されて博物館にあったものを見て来て考案したもの。



37 **玉華門**　鉄筋コンクリート造　総高11m　昭、44　この玉華門という名は、高階龍仙禅師が命名（額文字は師の御絶筆）彫刻は平沼とみ・作





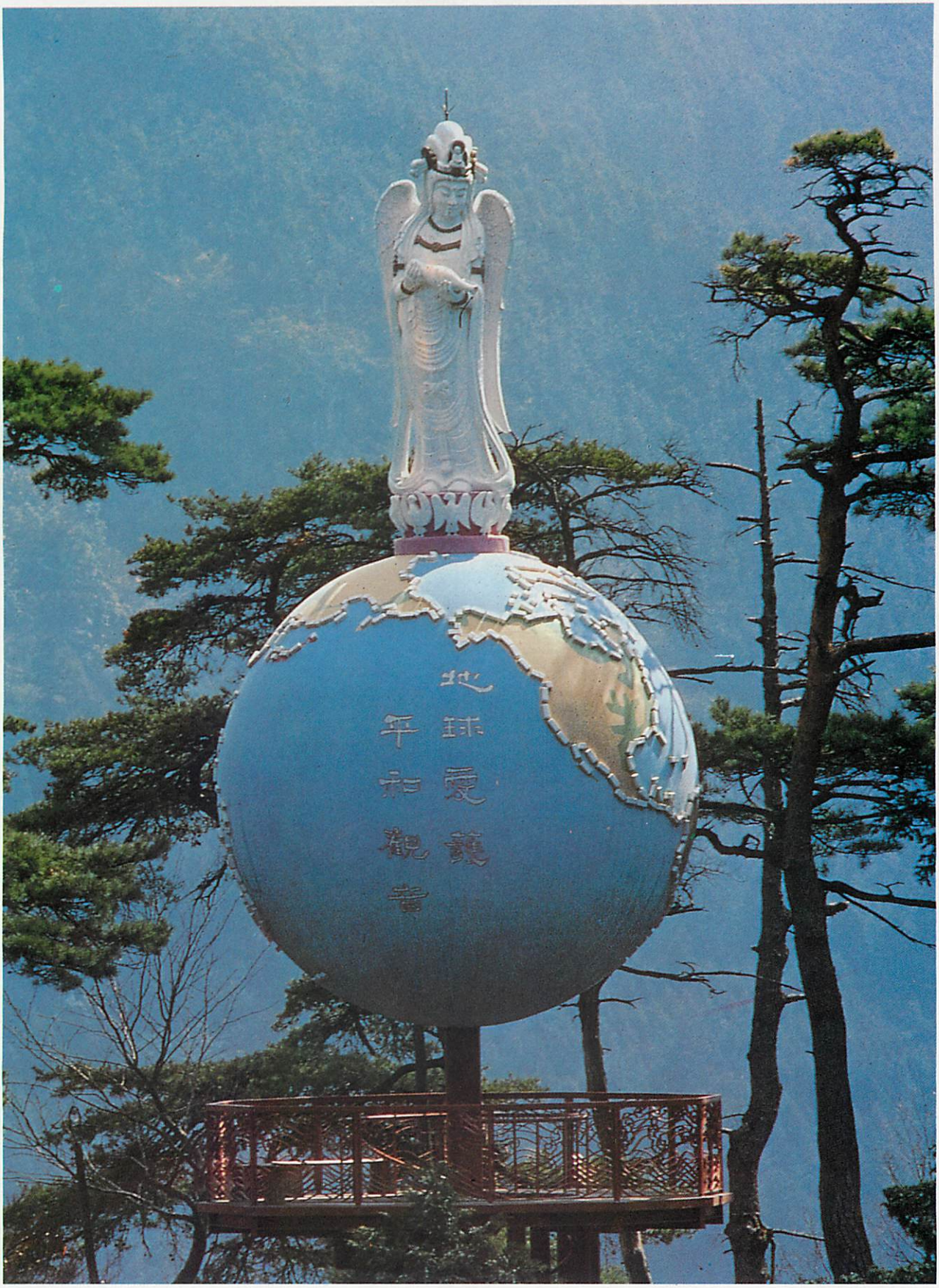
救世大観音堂宇内
中央大ドーム／中央に金箔大法輪、周囲に梵字24字を配す。中央柱八本の上部に散華の花籠を持つ天女像（八体）、他に八個の大燈籠がある。
天蓋／直径2.6m　天蓋の形は八角で、八個の象の彫刻の鼻から瓔珞（2.2m）が吊してある。これは堂宇にマッチさせるため寺院にあるのとは全く違った独創的なものとなっている。







ステンドグラス／中央ドーム　2.4×1.3m　両側ドーム　1.2×0.9m　堂宇内2階の窓にあり中央に3枚、両側に各3枚づつある。昭、46



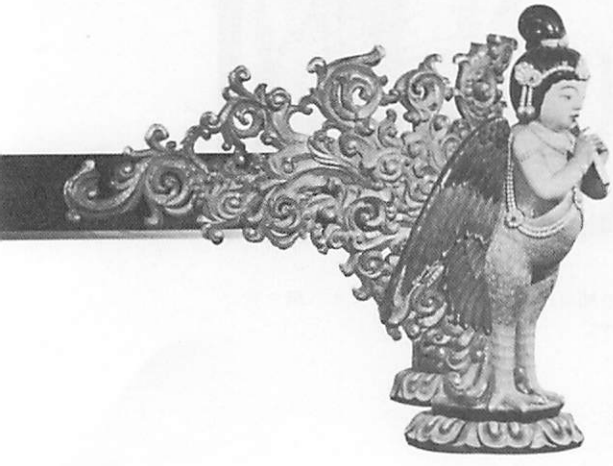
地球愛護平和観音　鉄筋コンクリート造　総高15m　昭、50



地球愛護平和観音(部分)　地球愛護の名のとおり恒久平和を願って建立。平和のシンボル、翼を背に、台座には直径５ｍの地球儀を配す。



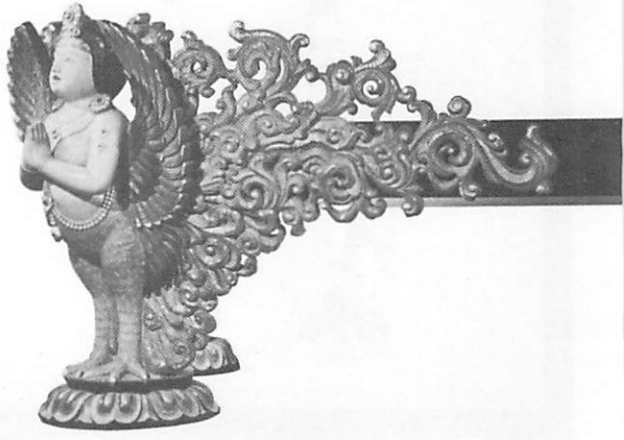
本堂内陣　天井には鳳凰図、四方の壁面には30余体の天女像、正面壁面には蓮華の形をした胎蔵界曼陀羅図、七観音前部には須弥壇、そして左右壁面にそれぞれ発願主御母堂壁彫、開祖桐江壁彫が配してある。

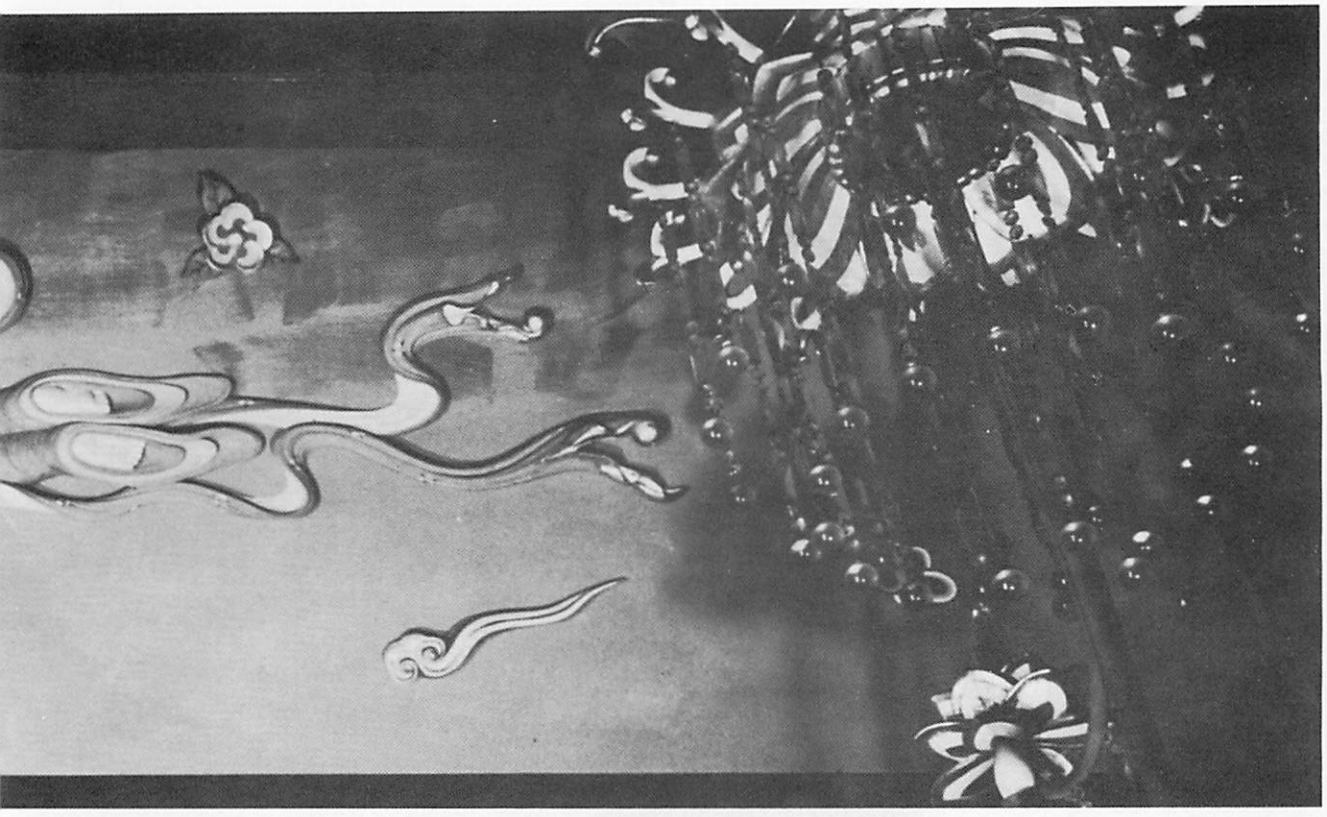


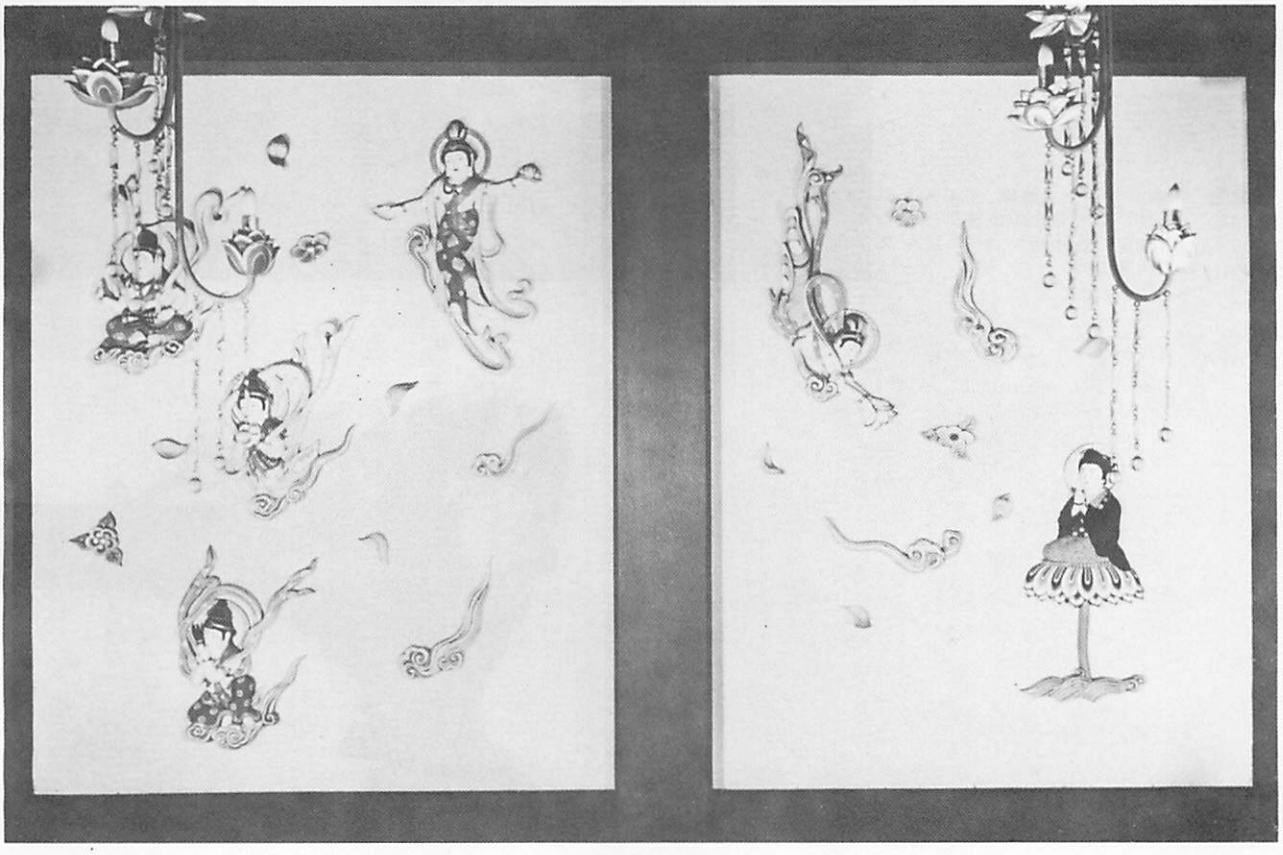
須弥壇　木彫　迦陵頻伽像（一対）、総高 1.2m　昭、34　親しみ深い伽陵頻迦像を配した須弥壇。迦陵頻伽は釈迦説法のおり、空中で非常な美声を以て妙なる音楽を奏したと伝えられる。（本堂内陣）



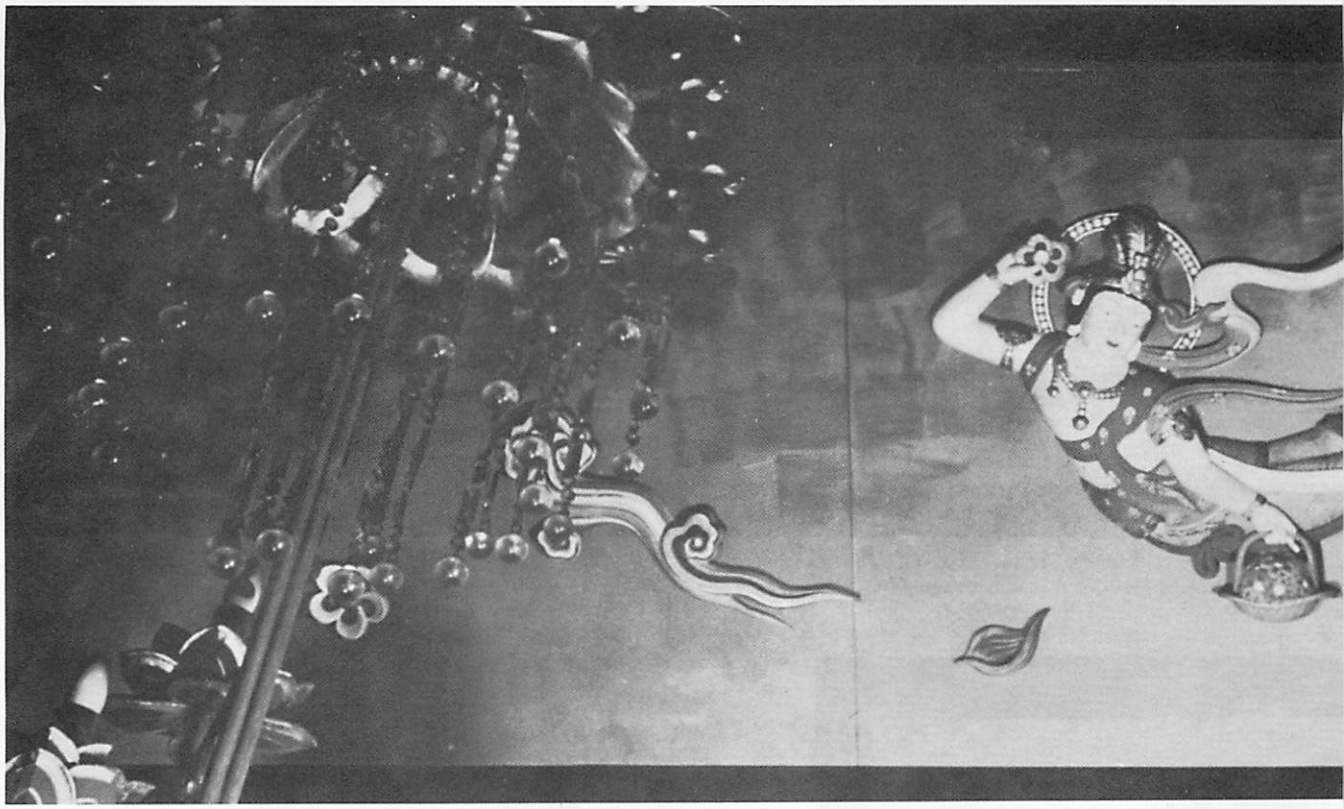
鳳凰図　木彫レリーフ　鳳凰、巾6×3m　昭、42　一般的には天井絵が普通なところから これも桐江の意欲的な一つの試みである。（本堂内陣天井）



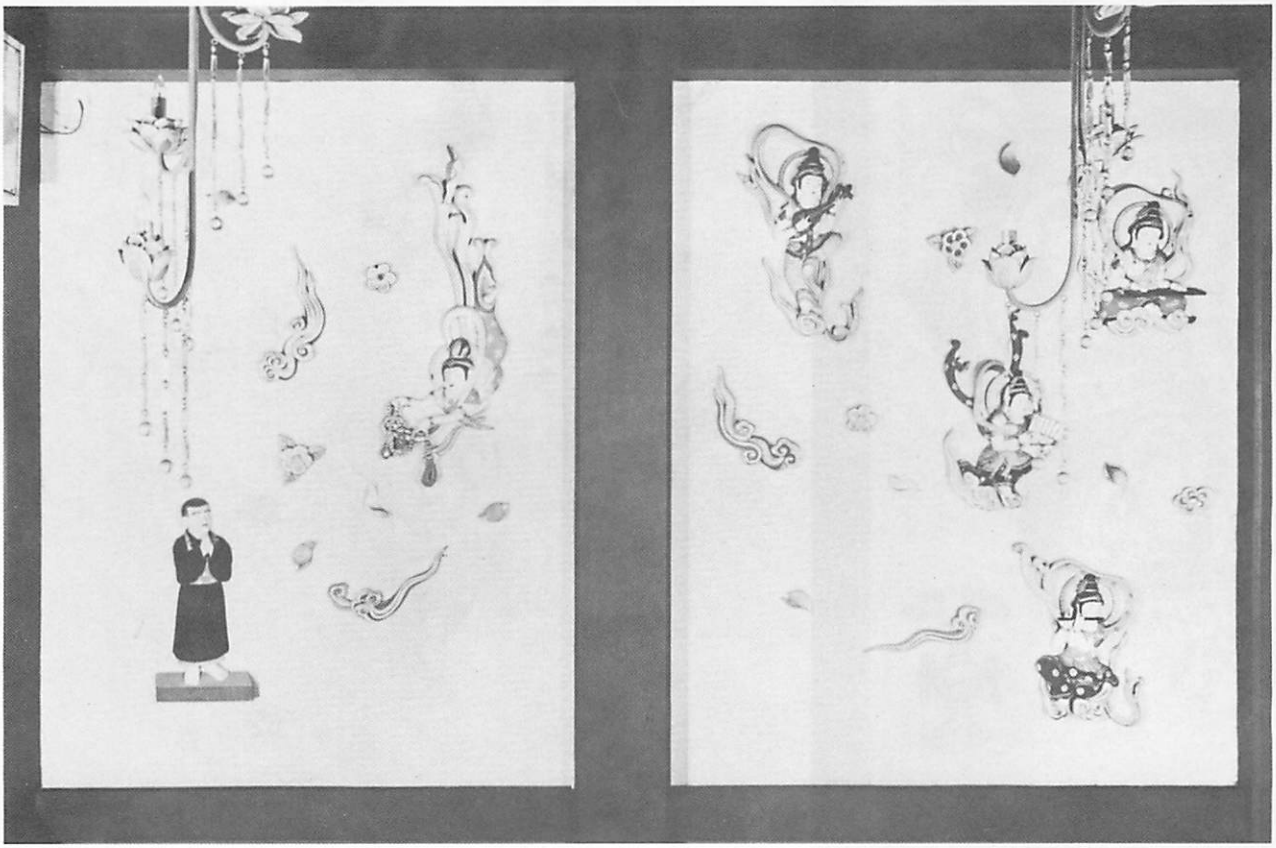




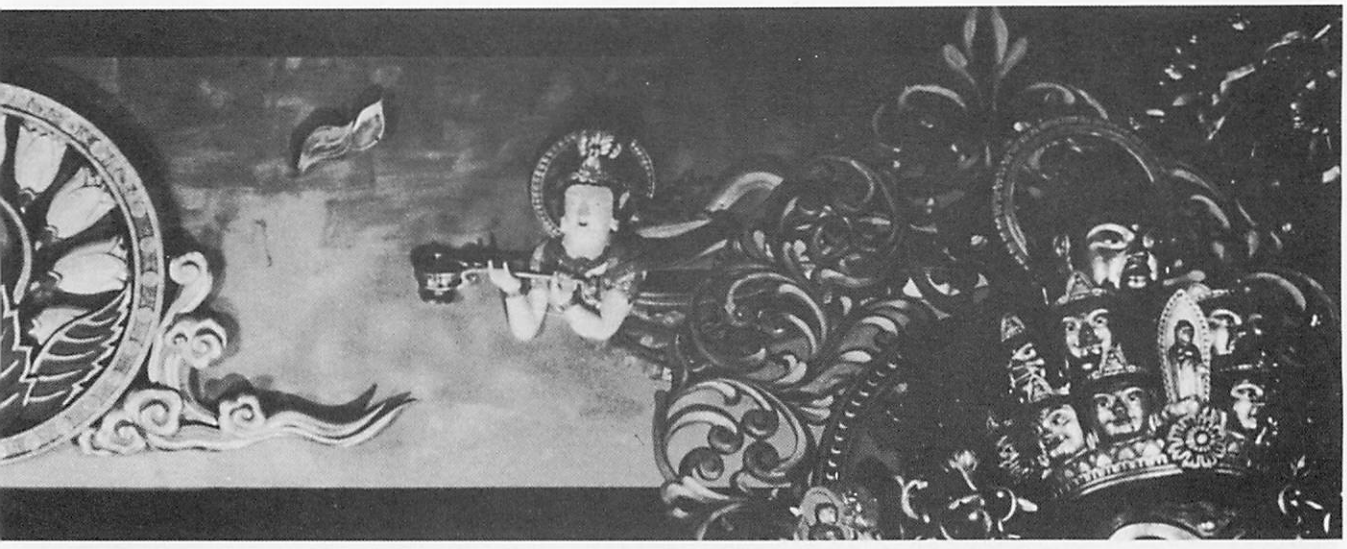
発願主御母堂図（本堂内陣壁彫）　木彫レリーフ　壁面巾３×２ｍ　昭、42



天女図（本堂内陣壁彫）　木彫レリーフ　巾２ｍ　昭、42　左右欄間には各２個づつ桐江独自の創作によるシャンデリアが４個吊されている。



開祖平沼桐江図（本堂内陣壁彫）　木彫レリーフ　壁面巾３×２ｍ　自刻像　昭、42

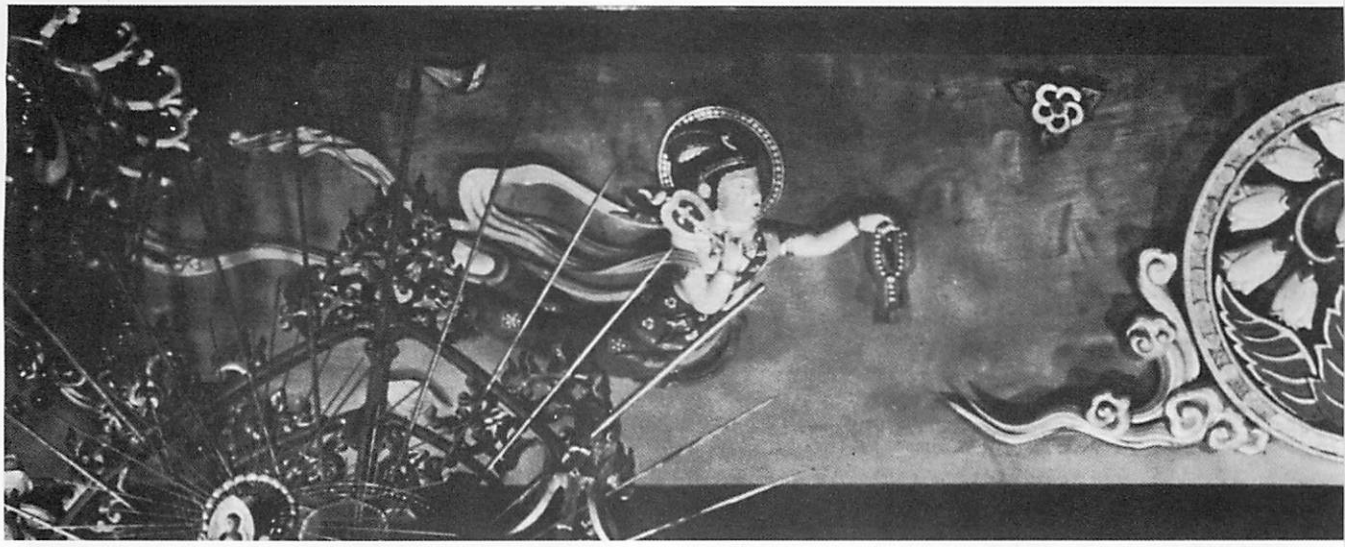


白雲木の孫木）が6月ともなれば純白の清い花が咲き匂う。鳥居観音のマークはこれを図案化したもの。

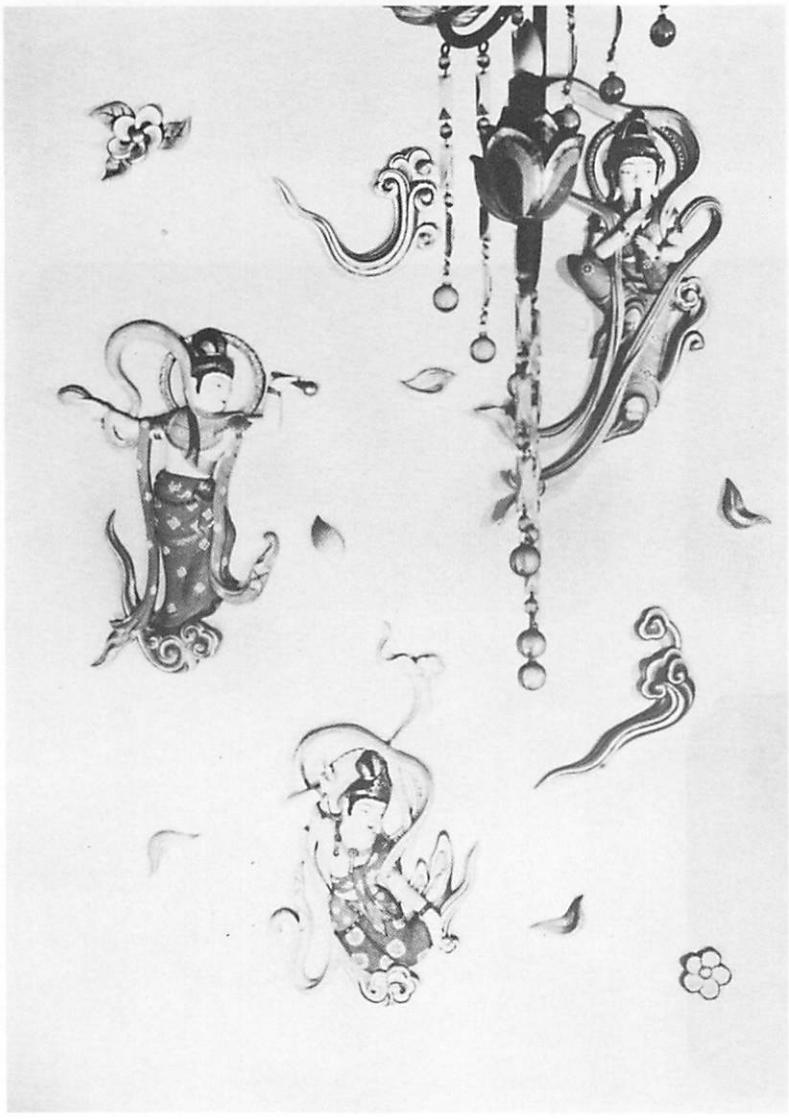


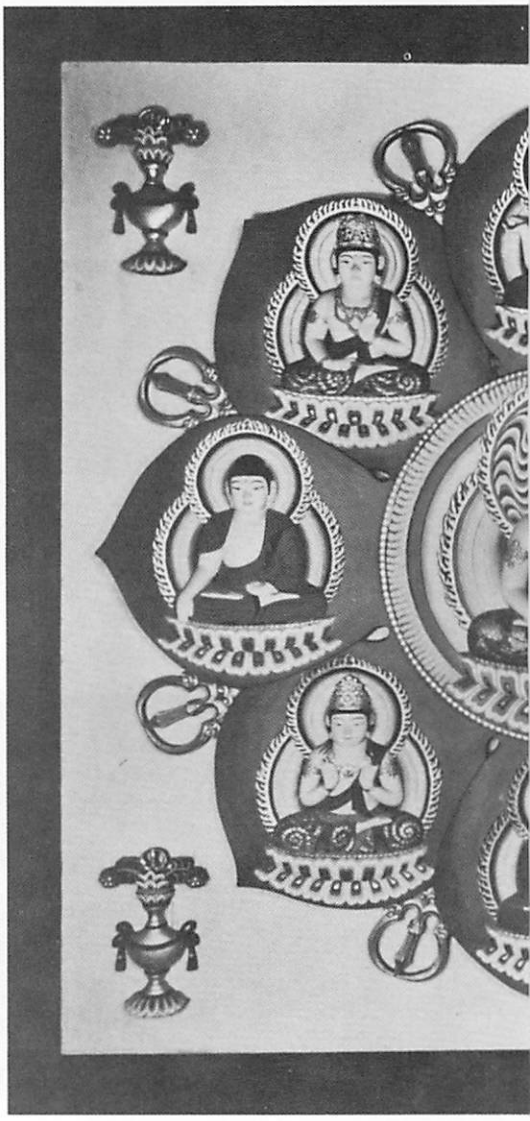


胎蔵界曼陀羅図（本堂内陣壁彫）　木彫レリーフ　直径2.5m　昭、42　　正面の曼陀羅は蓮華の形をした独自のもの。



鳥居観音紋章（本堂内陣壁彫）　木彫レリーフ　鳥居観音紋章直径１ｍ　昭、42　白雲山の地蔵堂前に、水野梅暁老師手植の白雲木（京都御所内





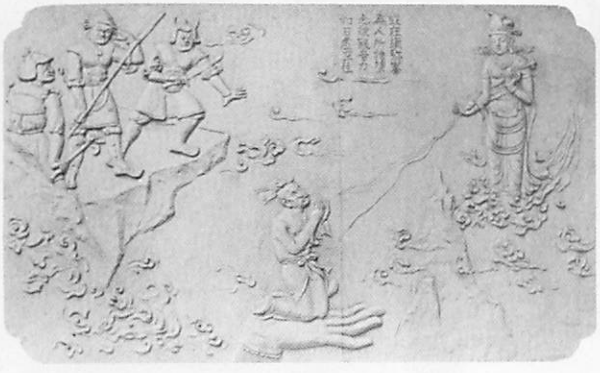
 内陣四方の壁面には30余体の天女像を配す。



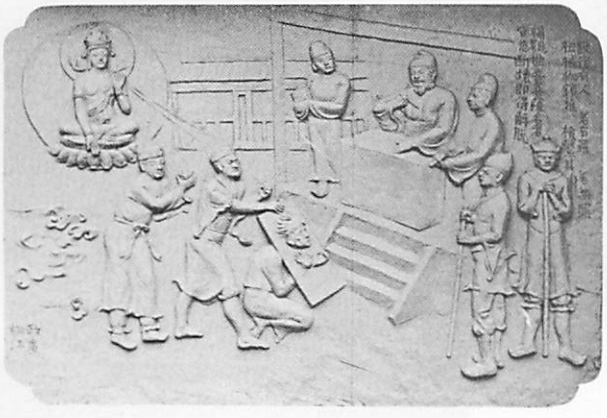












三十三応身図(一部)　セメント造レリーフ　各巾1×2m前後　昭、46（沢田政広・作）救世大観音堂宇外壁にある。全16枚。









49 **観音眷属二十八部衆**（一部）セメント造レリーフ　各巾0.5×1m　昭.46　二十八部衆の間のしきりは多様な草花や鳥獣を配す。全16枚。



玄奘三蔵法師　ブロンズ製　総高(台座共)4 m　昭、39　三蔵法師入寂1300年を記念してつくられた。桐江・作　銅像



51 **大香炉** ブロンズ製　総高 2.3m　昭､35　インドの博物館で見たものをヒントに考案した獣身女像の香炉。



大黒天　木彫　総高 1.6m　昭、43　桐江はこれまでに約400余体にのぼる大黒天を制作。



53 **子育地蔵尊**　木彫　総高 1.5m　昭、18　檜の根を利用して台座共、一本で彫刻してある。膝の子供は桐江の孫がモデル。

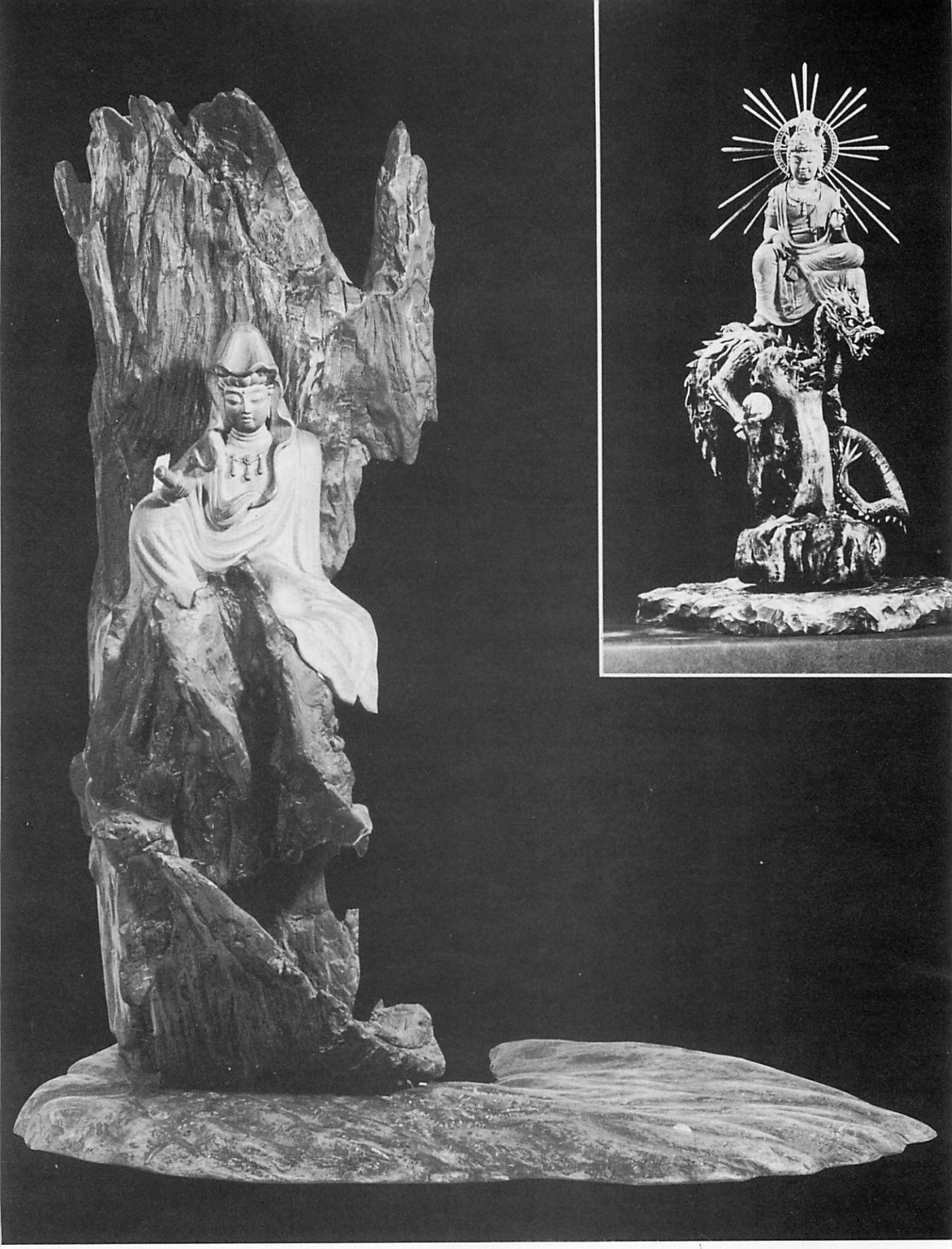


印度式釈迦如来　木彫金箔仕上げ　総高 2.5m　昭、48　納経塔内部の高さ 4 mの正面段上に二頭獅子の台座上に奉安されている。

作品 III

古来、日本の仏教彫刻は中国の影響を受けている。中国のものは印度に、そして世界の宗教彫刻はおのおの影響しあっている。桐江は長い人生体験をもとに近代感を取り入れ、今日、マッチしなくても何百年後の世には時代に適合するという彼独自の見解が遠大な計画の展望に組み込まれている。

この章は、白雲山境内にある鳥居文庫に所蔵されている桐江の創意に富んだ彫刻を掲載してある。

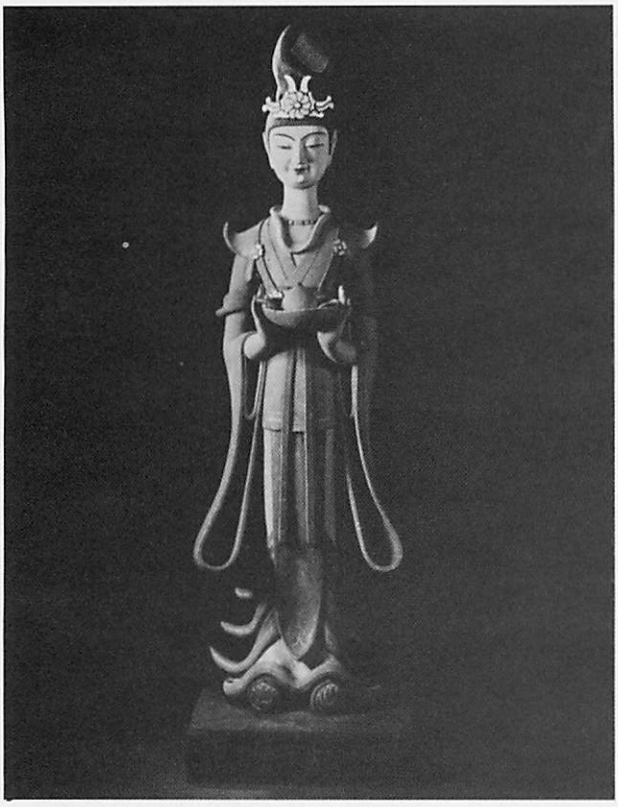


巌観音　木彫　総高 0.8m　大正、10年頃　仏像の表情に威厳や慈悲の相が出てこないことに内心苦しんだ桐江初期の頃の秀作。(鳥居文庫所蔵)

龍頭観音　木彫　総高 0.7m　昭、30年頃　(鳥居文庫所蔵)



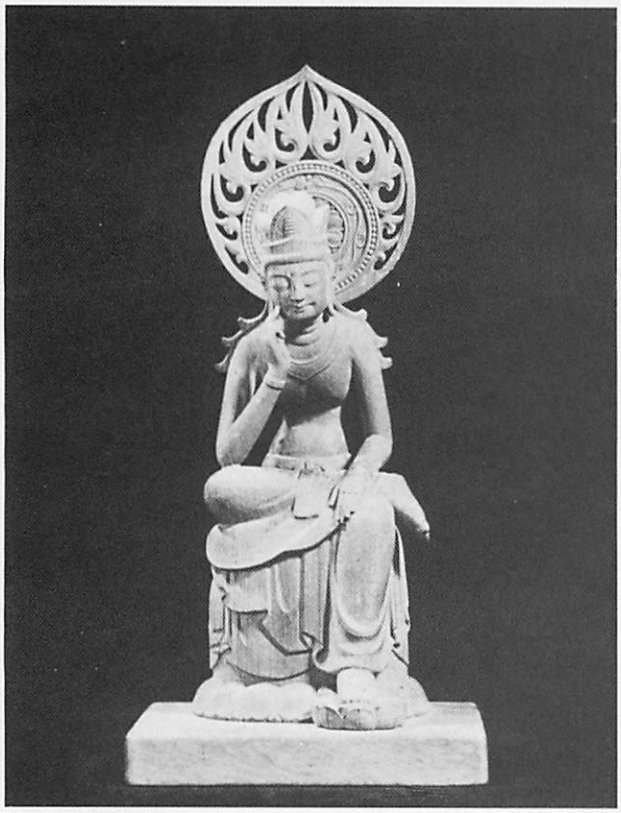
57 印度舞踊　木彫　総高 0.8m　昭、38　（鳥居文庫所蔵）



西王母　木彫　総高 0.8m　昭、40　（鳥居文庫所蔵）



聖観音四躯（一部）　木彫　総高 0.2m　昭、12年頃（鳥居文庫所蔵）



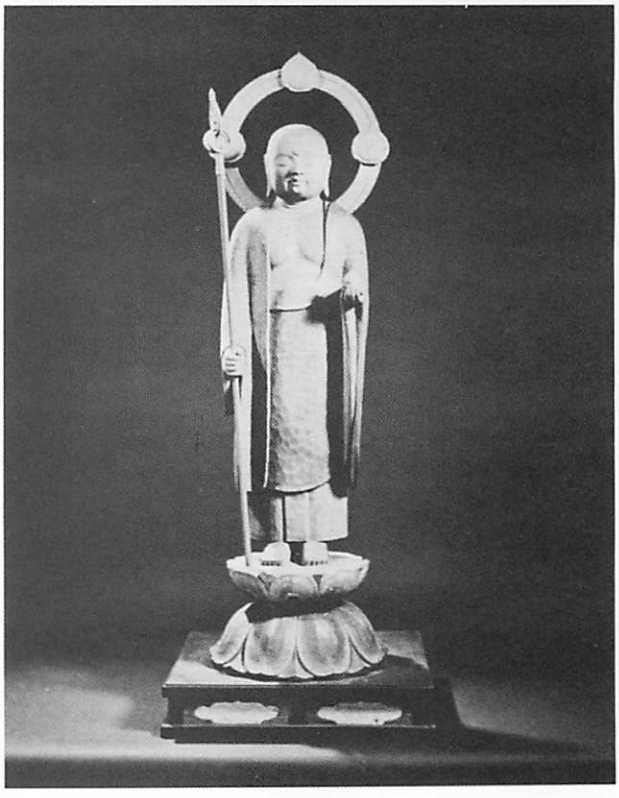
如意輪観音（小観音）　木彫　総高 0.3m　昭、35　（鳥居文庫所蔵）



阿弥陀如来　木彫　総高 0.3m　昭、32　（鳥居文庫所蔵）



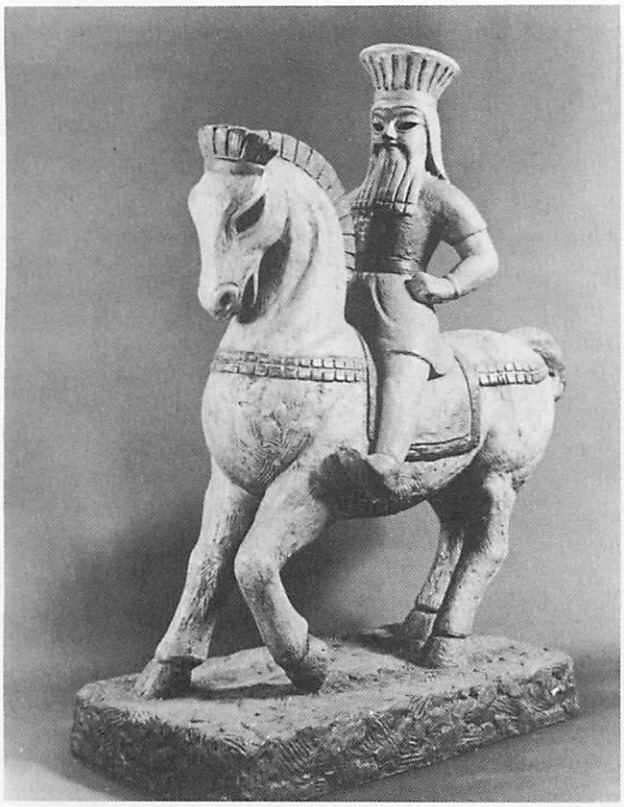
小観音　木彫　総高 0.3m　昭、12　（鳥居文庫所蔵）



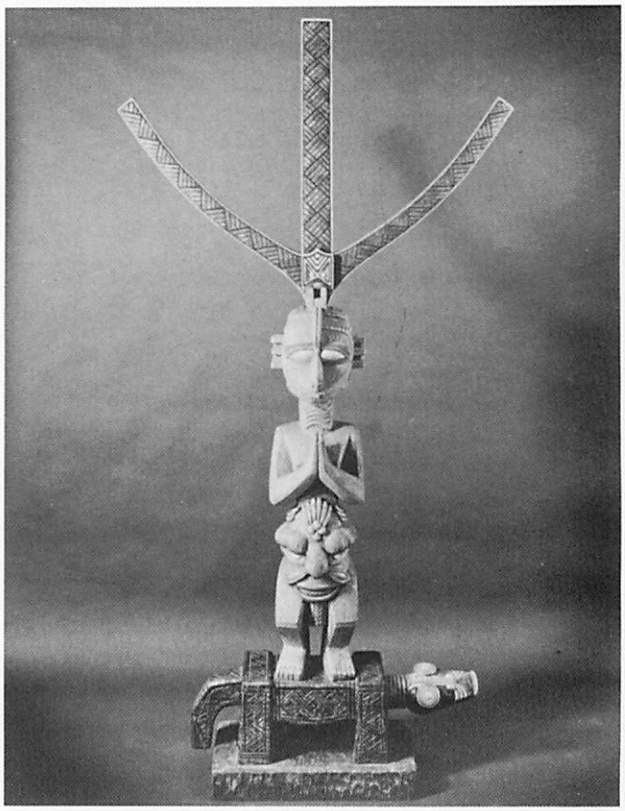
地蔵菩薩　木彫　総高 1 m　昭、34　（鳥居文庫所蔵）



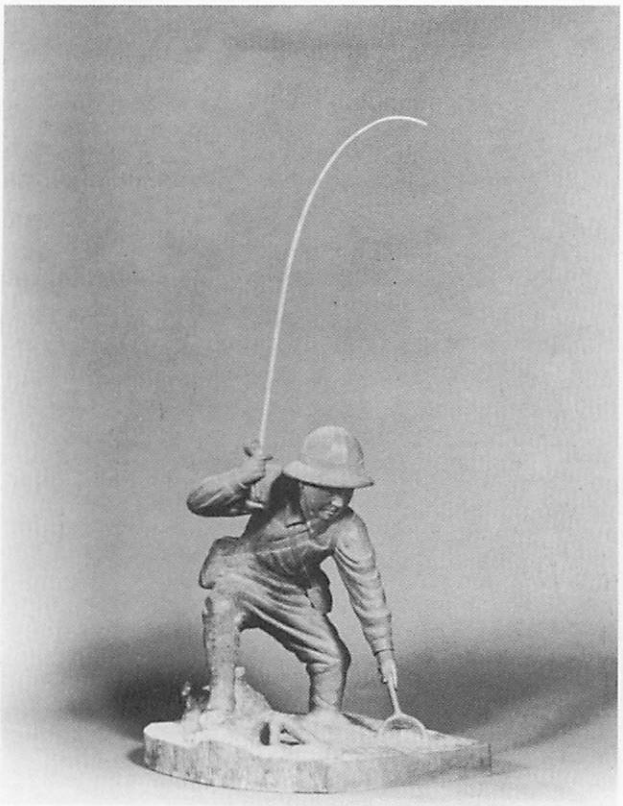
獅子舞　木彫　総高、各 0.3m前後　昭、8年頃　名栗村の郷土芸能として古くから伝わる獅子舞を模す。（鳥居文庫所蔵）



埴輪　セメント製　総高 0.9m　昭.37（鳥居文庫所蔵）



アフリカ神像　木彫　総高 2.4m　昭.37（鳥居文庫所蔵）



つり人　木彫　総高 0.7m　大正14年頃　釣り好きだった自分を思い出し彫った自刻像。（鳥居文庫所蔵）



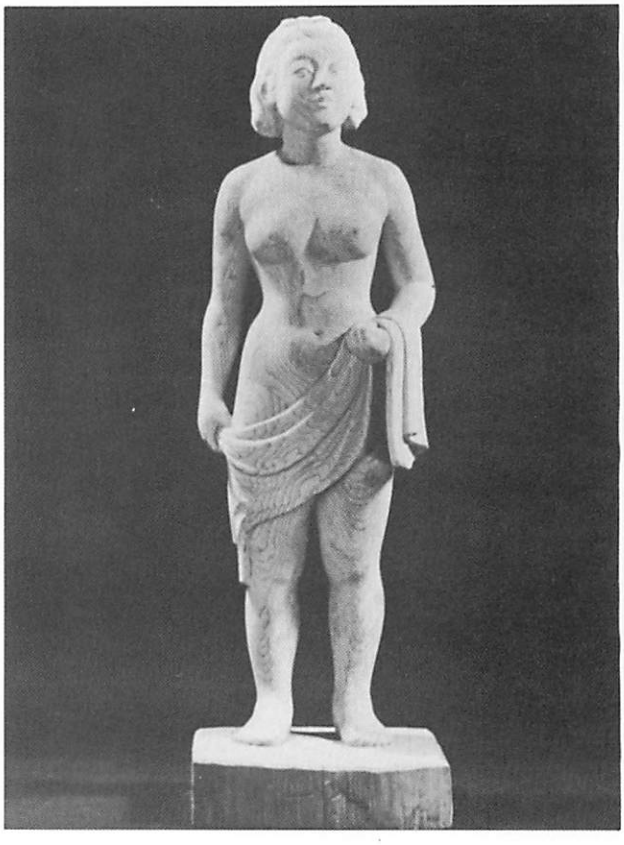
インドの陀神・ナーガス像　ブロンズ製　総高 0.3m　昭.33（鳥居文庫所蔵）



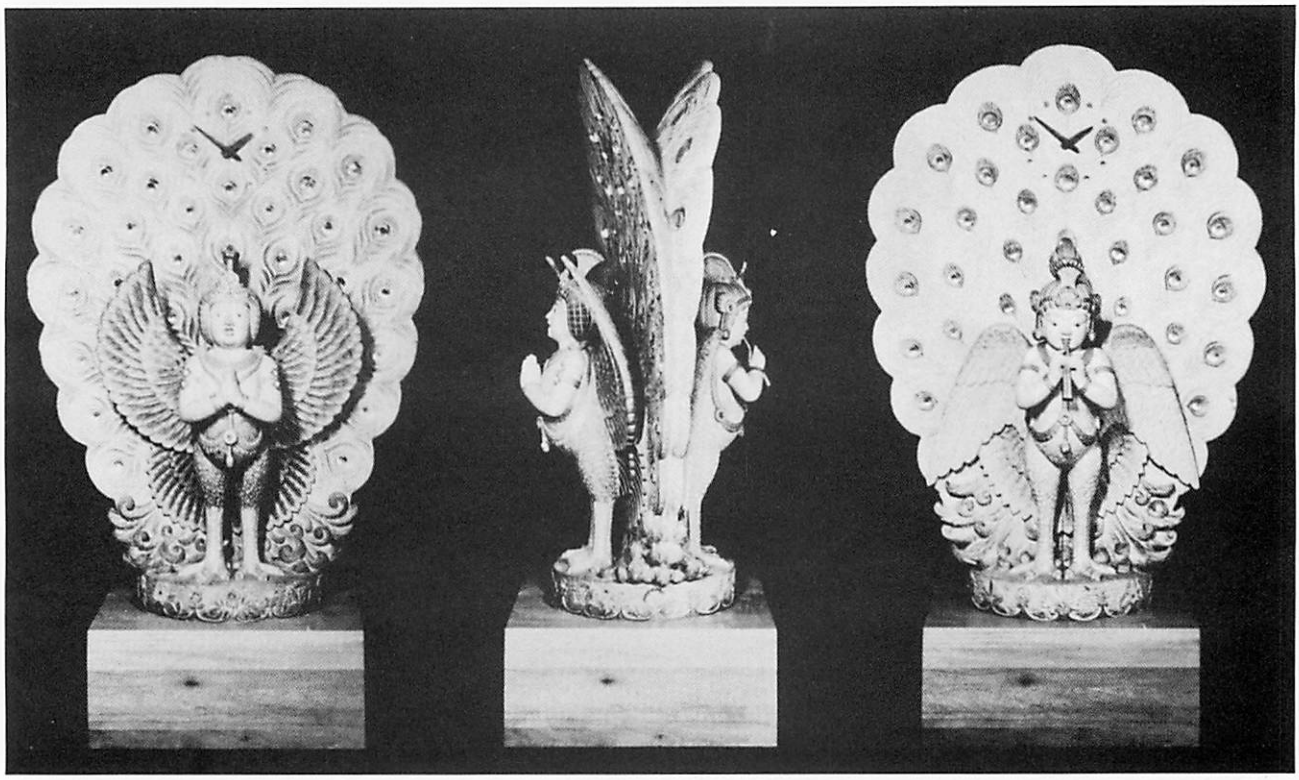
三猿　木彫　総高 0.3m　昭､39（鳥居文庫所蔵）辰歳生れの人たちが、招待されて伊勢神宮、出雲大社等、上空より参拝する。白雲の上は畳の下界の穢土は何も見えず、その時の心境をこの三猿に映したもの。



衝立式三観音　木彫　総高 1.2m　昭､38（本堂祭祀）

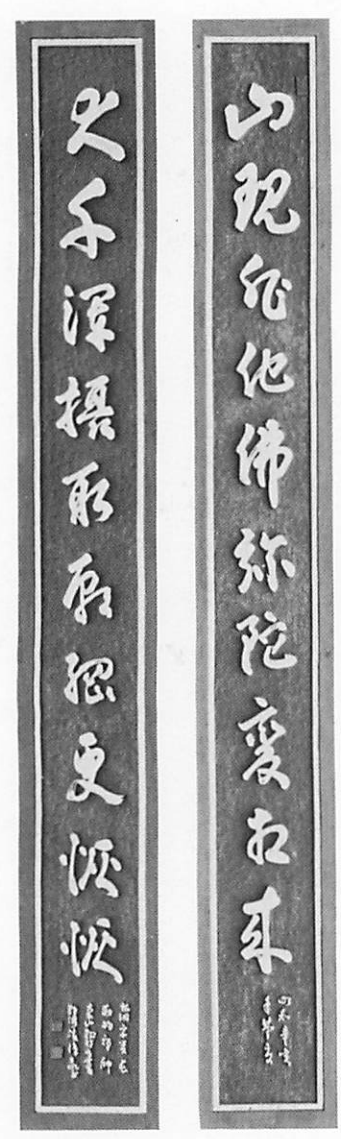


女の像　木彫　総高 0.7m　昭､10年頃（鳥居文庫所蔵）



迦陵頻伽　木彫　総高 2.3m　昭､33 （鳥居文庫所蔵）　オルゴール付時計、スピーカーが内蔵、回転する仕掛けがあり、埼玉銀行東京支店ロビーに据えられていたもの。





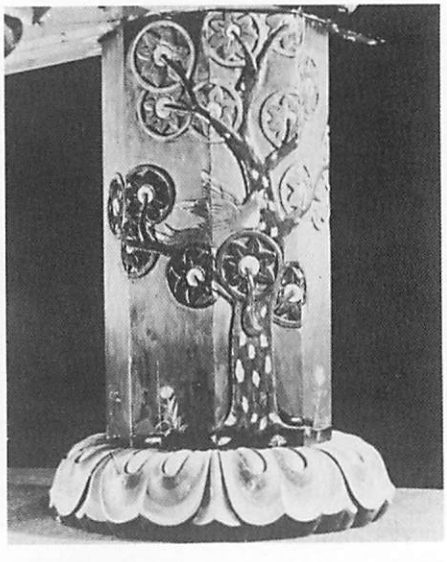
聯一対(救世大観音)　2.75×0.35m　昭、46
救世大観音堂宇内　中央ドーム正面の両側にかけられている。



裏　表　裏　表

聯一対(本堂)　2.6×0.24m　昭、34
本堂内陣正面の両側にかけられている。大休老師92才の時の御染筆。「諸行無常是生滅法」「生滅滅已寂滅為楽」老師の豪放な筆法を平沼とみ彫刻によってみごとに生かされている。

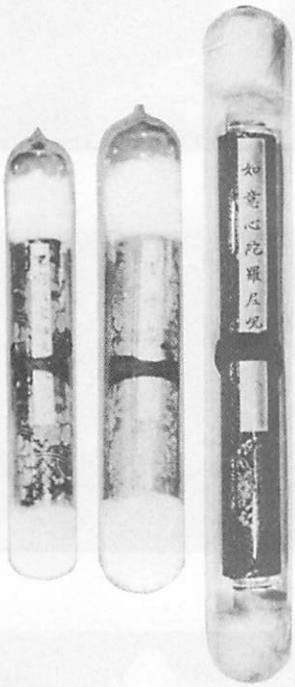




柱彫刻(須弥壇・部分)　高1m　昭、34　本堂内陣須弥壇の四柱のうち奥の二柱に施されている花の彫刻。

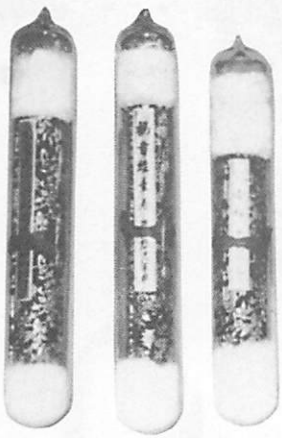


玉華門・額　1.7×0.7m　昭、44　この玉華門という名は高階龍仙禅師の命名だが、額の文字は師の御絶筆となる。





本堂・額　1.4×0.85m　昭、34　足利紫山禅師百才のときの御染筆で「白雲山」と書かれている。四隅の四天王は桐江・作。



真空管に収められた写経



三蔵塔・額　1 2×0.3m　昭、35　高階龍仙禅師の御染筆で「蓮華峰」と書かれている。



過去荘厳劫千佛名経

開元拾遺附梁　錄

經曰若有善男子善女人聞是三世三劫諸佛名號歎喜信樂稱揚讀誦受持命終之後能書寫為他人說或繫念作立佛形像或然供養香華妓樂敬佛功德志心作禮者勝用十方諸佛國土滿中珍寶施與尼拘陀樹至梵天百千劫中布施者是善男子善女人等已曾供養是諸佛已後生之後歷侍諸佛至于作佛而無窮盡皆當為三世三劫中佛之所授決所生之處常遇三寶得生諸佛刹土六根完具不墮八難當得諸佛三十二相八十種好具足莊嚴若能五體投地作禮口自宣言我今普禮一切十方三世諸佛願三業休息國豐民安非兵災起四方道俗等共一心此功德願共六道一切衆生皆生無量壽佛國立大誓願使諸衆生悉生彼刹身諸相好智慧辯才如阿弥陀佛所發菩薩提願空空

三千仏名経「過去」



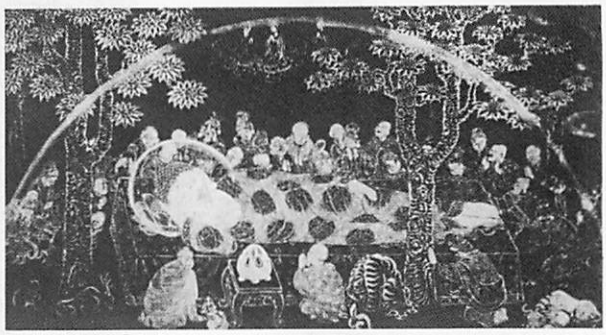
現在賢劫千佛名経

開元拾遺附梁　錄

爾時尊王菩薩白佛言世尊今此　中頭有菩薩摩訶薩得是三昧亦得八萬四千波羅蜜門諸三昧門陀羅尼門者不佛告尊王今此會中有菩薩大士得是三昧亦能入八萬四千諸波羅蜜及諸三昧陀羅尼門此諸菩薩於是賢劫中皆當得阿耨多羅三藐三菩提除四如來於此劫中得成佛已尊王菩薩復白佛言惟願如來宣此諸等菩薩名字多所饒益安穩世間利諸天人為護佛法令得久住為將來菩薩顯示法明求無上道心不廢懈佛告尊王汝今諦聽善思念之當為汝說唯然世尊願樂欲聞爾時世尊即說諸佛名字

南無拘留孫佛　南無拘那含牟尼佛　南無迦葉佛　南無釋迦牟尼佛　南無弥勒佛　南無師子佛　南無明炬佛　南無牟

三千仏名経「現在」

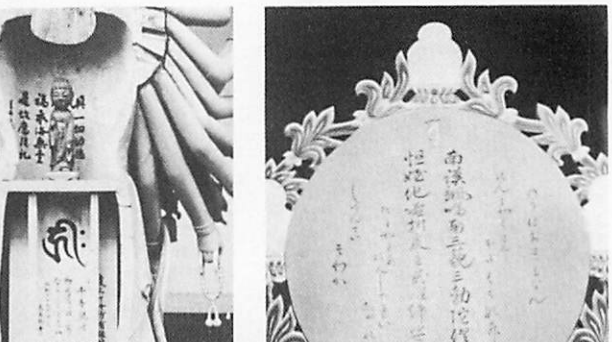


未來星宿劫千佛名経

開元拾遺附梁錄

夫修善福緣為惡禍微明理破然而信悟者鮮覩其生此五濁惡世五陰煩惱三毒熾盛輪轉生死有竟已昔佛在世時人民數如恒沙今滿閻浮萬不遺一何以故爾為善者少作惡者多死墮三塗恣為魚畜生不復得人身救法華經云三惡道充滿天人衆減少劫盡不久長寒可怒是以如來隨方救化教慈悔善不怪貽命勤行精進可得免度難拜俄頃之勞獲即無量劫罪滅福生以致無為此未來星宿劫中當有千佛出各名字如是若人聞名一心禮事不生懈怠必得涅槃永離三塗生死惡趣是為慧果是多聞若能受持習誦之者是人劫劫必聞千佛授記無量阿僧祇劫生死重罪悉得清淨神通三昧無礙辯才諸大法門陀羅尼門一切經書陰陽智慧隨宜說法不自歎譽稱揚其名利勿

三千仏名経「未来」



鎌倉彫

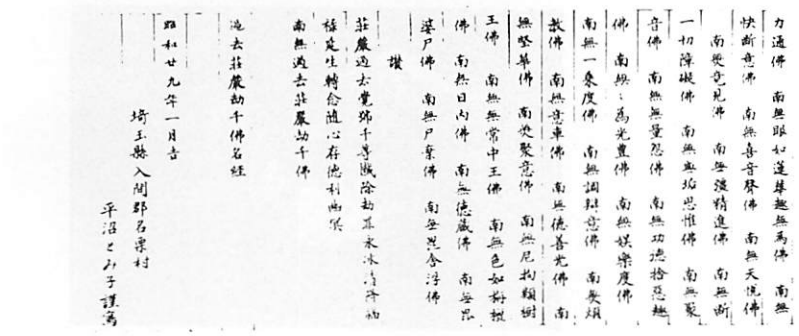


作品II（花瓶敷）　作品I（菓子器）



千手観音胎内「縁起」

准胝観音光背裏面「御真言」彫刻



寂滅月屋日在王佛　南無成就佛　南無
最上威佛　南無越智無佛　南無寶正見
佛　南無供養度佛　南無師子音佛
南無音德佛　南無寶中佛　南無意德光
佛　南無蓮華光佛　南無大悲光佛　南
無淨身佛　南無除衆疑佛　南無無垢成
神佛　南無住阿僧祇精進功德佛　南無
護妙法慧佛　南無喜可威神佛　南無衆
疑佛　南無德住佛　南無喜見佛　南無
喜可威佛　南無不威德佛　南無無垢成
佛　南無光遊戲佛　南無須彌佛　南無
捨諸佛　南無等意佛　南無喜見佛　南
無寶普護佛　南無金剛合佛　南無智慧
衆佛　南無喜廣佛　南無無愛德佛

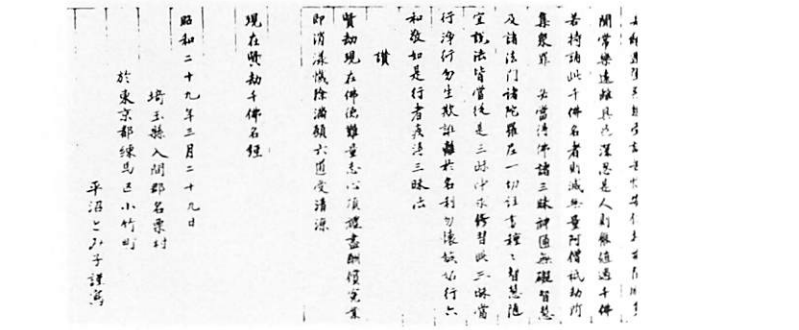
力遍佛　南無眼如蓮華趣無為佛　南無
快斷意佛　南無喜音聲佛　南無天慧佛
南無意見佛　南無護精進佛　南無斷
一切障礙佛　南無無垢思惟佛　南無聚
音佛　南無無量怒佛　南無功德捨惡趣
佛　南無一為光意佛　南無娛樂度佛
南無一衆度佛　南無調意佛　南無頂
救佛　南無寶車佛　南無德善光佛　南
無堅華佛　南無聚意佛　南無尼拘類樹
王佛　南無無常中王佛　南無色如樹提
佛　南無日內佛　南無德藏佛　南無眾
華尸佛　南無尸棄佛　南無光參浮佛

讃

莊嚴過去電跡千億賊除劫其永入涅槃如
福定生轉念施心存德利曲躬
南無過去莊嚴劫千佛

過去莊嚴劫千佛名經

昭和廿九年一月吉
埼玉縣入間郡名栗村
平沼とみ子謹寫



南無無垢佛　南無日藏佛　南無月氏
佛　南無衆福佛　南無善明佛　南無無
憂佛　南無提沙佛　南無明耀佛　南無
持髮佛　南無功德明佛　南無示義佛
南無遊步佛　南無共威佛　南無藥師佛
南無善淨佛　南無白意佛　南無妙國
佛　南無福威德佛　南無不可壞佛　南
無德相佛　南無羅敵佛　南無衆主佛
南無梵聲佛　南無堅勝佛　南無不高佛
南無作明佛　南無大山佛　南無金剛
佛　南無將衆佛　南無無畏佛　南無妙
賢佛　南無華日佛　南無華力佛　南無
香焰佛　南無仁愛佛　南無大威德佛
南無梵王佛　南無無量明佛　南無龍德

佛功德皇心作禮者勝用十方諸佛國土滿
中珍寶施摩厄珠授至貳天百千劫中而布
施者是菓報妊子女前已曾供養走如衆已
其人後生得此功德至於作佛而無窮盡守
當為贊劫中佛心所授決其人所生之處常
遇三寶得生諸佛刹土六情完具不墮八難
三十二相八十種好疾得具足若能一過五
體投地而為作禮口自宣吉我今普禮一切
十方三世諸佛至十佛過慈後乃起所得福
祐如上所說持此功德願共一切五道衆生
其無常者生無量壽佛國立大指願使諸衆
生悉生彼利生彼利已身諸相好智慧辯才
如衆世尊阿弥陀佛所護衆報亦如世尊未
來里宿劫十佛名經

願文

日支事変勃の昭和十七年南京駐屯の高森
陸介部隊が稲荷神社を建立すべく小高い所
と、恐地中一個の石棺を發掘しはかりずも之

の玄奘三蔵法師の頭骨と認めたるものである事
判明す依て重光葵駐華大使と介して中国
政府より引渡し早速南京法師の霊骨塔が
建立すべき筈なりたり
其時日本代表として水野梅暁先生と倉持秀
峰師が式典に参列され中国側の申出によって
其分骨を日本へ奉持せらるその後埼玉縣
天台宗慈恩寺境内に十三重の霊塔の建立され
其一分を奉安供養す然るに梅暁先生は更に
法師の遺徳を廣く一名栗の白雲山にも
霊塔を建立し分骨せられんことを請願し
いくばくもなく昭和二十四年の晩秋惜しくも遷
化せられたるふとみ先生より仰ぐ先生に御
生前のある日「塔に納むるための如何なる仏典
浄書すべきや」と教示せられ
依て直ちにこれの研究を始め仏教後
不自由の中に和風宣主馬偏一部師の御序意
いろいろ用紙次ゆつり受け更に古水秀氏の
浄写をうけ、この経巻をつくり
尚文字の分明ならざるところ、あり、個こ

現在賢劫千佛名経

昭和二十九年三月二十九日
埼玉縣入間郡名栗村
於東京都練馬区小竹町
平沼とみ子謹寫

賢劫現在佛德難量志心頂禮盡虚空遍
即消滅慚除滿願永盡度清源

讃



作品Ⅵ（茶筒）　作品Ⅴ（茶箱）



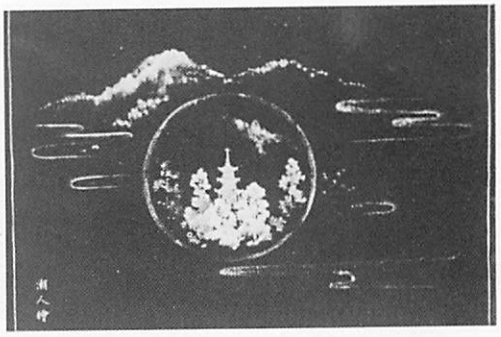
作品Ⅳ（硯箱）

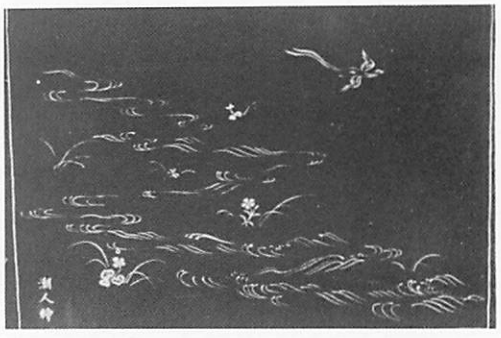


作品Ⅲ（文庫）



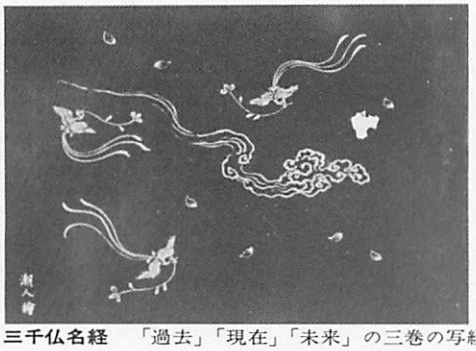
三蔵塔納骨塔
この中に三千仏名経が奉安されている。

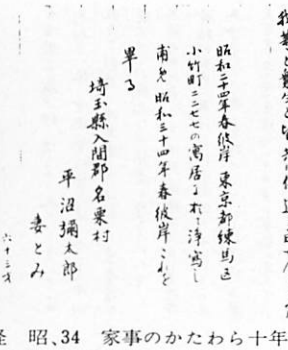




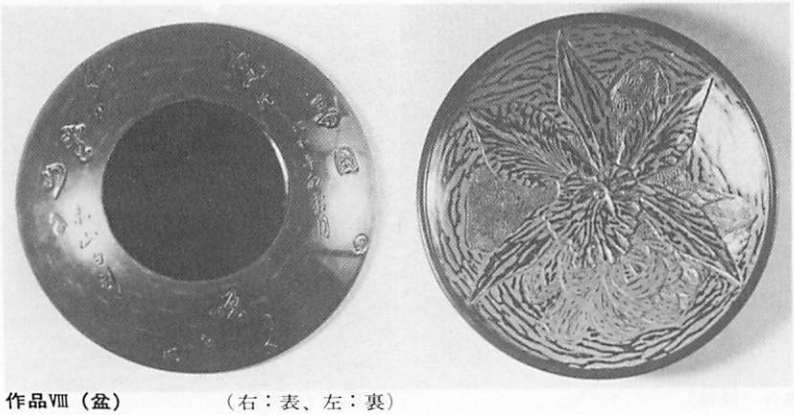


三千仏名経　写経箱





三千仏名経　「過去」「現在」「未来」の三巻の写経　昭、34　家事のかたわら十年という驚くべき歳月と根気をかけたもので彼女の信仰心の篤さと努力のたまものといえる。



作品Ⅷ（盆）　（右：表、左：裏）

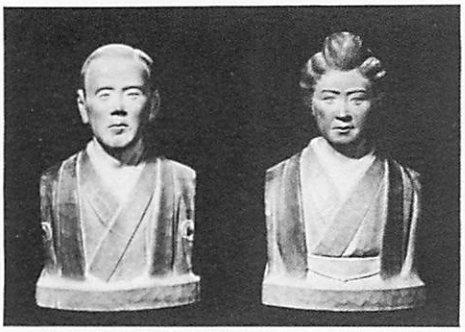


作品Ⅶ（鳥居観音紋章刻・盆）

概説

観世音の具現にかける情熱

平沼桐江・概説



桐江が彫刻した父母胸像

〈生家と生いたち〉

名栗川の上流、白雲山の山ふところ、春は生あるものの喜びを謳歌する花の宴、夏は清冽な水の涼しさ、秋は全山を燃やす紅葉の色、俗界の煩わしさをみじんも感じることのないここ名栗の地に、御仏の国を現世に再現したかのような観音郷がある。

白雲山・鳥居観音の開祖、平沼彌太郎（号・桐江）は、明治二十五年六月十二日、埼玉県入間郡名栗村大字上名栗三一九三番地に父平沼源一郎と母志げの長男として生まれた。

平沼家は先祖代々、林業を営む名栗の名家、彌太郎は十一代の当主である。

父源一郎の妻志げは後妻として嫁し、彌太郎を最初に生んでいる。

志げは観音信仰に篤く、鳥居観音の発願主で、信行院徳室妙鑑大姉という。

この母の信仰心が、彌太郎をして鳥居観音を開基せしめ、彌太郎の大きな心の寄りどころとなっているのである。

〈学徒から林業へ〉

彌太郎の父源一郎は病弱の身であったので息子彌太郎に早く家業をおぼえさせることを願っていた。

そのため、東京、小石川の伯母、武田錦子の家から京華中学校に通っていた彌太郎は、大学進学の希望を容れられず、中学卒業後すぐ、二十才にして家業を継がねばならなかった。時に明治四十五年四月である。

はじめは父の意に反抗して家を飛び出したりもしたが、もともと木とともに育ち、山を愛している彼は、（若い頃、号を愛山と称した）家業に手をつけるや大いに精励し、事業拡張をはかって精力的に飛び回った。

彌太郎は十年の歳月をついやして、四十年輪伐にする工夫や、経済情勢に対応する林業経営など、長期的かつ綿密な視野のもとに、持ち山の実測図を作成、木の年代、本数などを調べて樹木台帳を作り、総石数の算出、木の年代の統一など、計画的な林業をめざした。

このような彼の林業経営手腕は定評のあるところとなり、県内はもとより全国組織に及んで林業関係諸団体の重要ポストに推され、公務に多忙をきわめるようになっていった。

〈多忙をきわめた公務〉

まず、埼玉県山林会では彼が二十代になった大正初めから約二十年間を副会長として務めた。梨本宮様を総裁とする大日本山林会や帝国森林会では長い間にわたり評議員や理事として加わっており府県大会などによく出向いた。

昭和五年、木材関税改正期成同盟が結集され彼も参加し、議会などに陳情運動を盛上げた。この同盟が母体となり全国山林連合会が結成され、彼は常任理事となった。一方、昭和六年、自分の生まれた名栗の村長になり村会で活躍した。

このように家業とともに村や林業諸団体で重要な役割を果たしながら、さらにもう一つ金融関係の重責もになっていた。

彼が初めて銀行経営に携わったのは大正九年、父源一郎らが創立に関わる飯能銀行に取締役として入行した時で、昭和十八年に県下の銀行四行が合併するまでその位置にあった。

昭和六年頃、飯能銀行で有名な取付け騒ぎが起こった事件がある。

そんなとき同行会長が急逝し、同行重役たちは彌太郎を会長に推し再建を懇望してきた。彼は三ヵ月近く固辞し続けたが余りに強い要請だったことと、父源一郎が初代頭取だった関係、地方産業の振興という年来の考えから昭和七年飯能銀行会長に就任した。


恩重堂（旧、観音堂）


「つづみ」昭和２年作

彼は会長に就任するやテキパキと問題の処理にあたり、取付け騒ぎ以来五年で同行預金は事件当時を上回るまでになった。その後、金融業でますます活躍し昭和二十四年以降は埼玉銀行頭取時代を迎え、さらに参議院議員（昭和二十二年～二十八年）も勤める。

その行動力、バイタリティには驚くべきものがあった。しかし、それ以上の努力が白雲山境内十万坪に、さらに積み上げられて行くのである。

〈観音郷づくり〉

一方、故郷西川林業地（西川とは江戸の西の意、川を利用して木材を江戸まで運んだ。この地域は関東の吉野といわれるほどであった）を歴史の流れの上に永久に止めたいという気持が彼の中に大きく育っていた。

それには、ここを観音の寺領として永久保存することこそ、自分の気持にかなうことと彼は考えた。

大規模な測量の結果をふまえ、昭和十五年（観音堂に聖観音を安置する前後）頃より、ジャンパーに地下足袋、ほほかむり、腰にナタをさげ、鎌を手にしたいでたちで、数人の手伝いと共に山の手入れに精を出した。

この作業は、その後三十年間、根気よく営々と続けられたのである。

この三十年間にわたる根気と努力の結果はいま見事に実りつつあり、白雲全山の三分の二を占めるうっ蒼たる杉・檜とその大木を彩って咲く四季折々の花が、聖地白雲山をより幽玄なものにしているのである。

何十年か何百年かの後、ここを訪れた人が年輪を刻んで林立する木にやすらぎを覚えるとき、彼の努力と木への愛情が永遠に生き続けることになるのであろう。

〈母の遺言、観音堂建立〉

平沼彌太郎が鳥居観音を開基した動機は、前述のように母の遺志によるものである。

大正五年十月四十八才で早逝した母志げはその志を彌太郎に遂げてくれるよう遺言していた。

生前母と観音堂建立の場所を探して歩いた白雲山中の嶮しい斜面、恩重堂の場所をそれと決め、三坪ほどの小さな堂宇を建立したのが、昭和十五年四月のことであった。

お堂には彌太郎自らがノミをふるった聖観音と梵天、帝釈天を配して安置、ここに鳥居観音の礎ができあがった。

このように建築が困難な場所をわざわざ選んだ彌太郎の試みは、母の遺言を実現するために自らを困難に立ち向わせているように思われるのである。

このような姿勢は、今日に至るまで一貫しているものであるが、鳥居観音三十有余年の歴史はここに始まったのである。

そしてまた平沼桐江（彌太郎）の仏像彫刻の歴史もここに本格的に始まり、桐江の観音信仰は創作活動とともに深遠さを増し、信仰という抽象的なものが巨大な鳥居観音構想のひとつひとつの実現となって表象されていくのである。いまでこそ彼の思想は具体的な形で見ることができるわけだが、このときすでに、遠大な宗教的ビジョンが彼の内部に形づくられていたことは、彼以外知らないところであった。

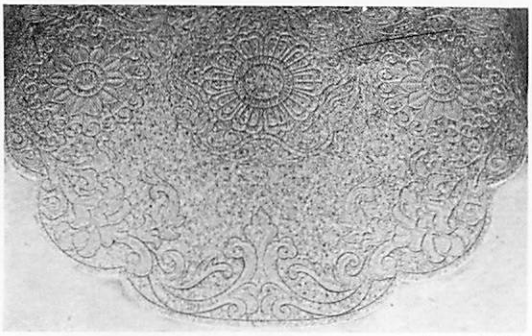
この記念すべき堂は、赤坂離宮の設計者の一人中里清五郎の設計、内部の漆塗は桐江の弟、浄の手になるものである。

落慶にあたっては、永平寺管長鈴木天山禅師が開眼し、『施無畏』と揮毫した扁額を納めている。

のちの今日、恩重堂と称され、現在両親が祀られている。

〈師を求めて〉

家業の経営のほか県の山林会、全国森林連合会など



救世大観音堂宇入口ムーンストーン（とみ作品）



とみ作品鎌倉彫短冊入れ
（鳥居文庫蔵）

多くの公職のポストにあった彌太郎は、さらに飯能銀行会長という要職までも引きうける経緯となっていた。

この多忙きわまる彌太郎が、彫刻の道に手を染めたのは、まったくの偶然といっていいほどである。

昭和七・八年、当時小学校へ行っていた長女が宿題の木版彫りをしているのを見て、つい手を出したのがキッカケである。

しばらくの間は自分の好きなものをアレコレ彫っていたが、東京、練馬へ居を構えたのを機に、近所の開発春光という先生に教えてもらうことにした。

そんな彼が帝展で仏像彫刻の第一人者、三木宗策が出品した聖観音に魅せられ、そこに居合わせた三木宗策に弟子入りを懇願した。

そして、師のアトリエにて粘土こねから勉強し聖観音の制作に取り組んだが、仏像には威厳や慈悲の表情があらわれず、彌太郎を悩ませることになった。

その頃、本郷、大円寺の住職、服部太元老師の「素人が信者の拝む仏像を彫るなどとはもってのほかだ」の一喝で、真の信仰心なくして真の仏像は彫れないことを悟り、西国三十三ヶ所の観音霊場巡りを思い立ったのである。ときは、昭和十二年頃、日本は戦争へと傾きはじめていた。

こうして開かれた彌太郎の仏像彫刻への眼は、その後、沢田政広（後述、本堂十一面観音制作者）、村岡久作の指導、協力を得てさらに磨かれていった。

〈桐江の伴侶、とみ〉

世の良妻を讃える言葉として「内助の功」とよくいわれるが、桐江の妻とみこそ、まさにそれである。

亡母の遺志をうけた夫桐江が信仰心に眼を開き、仏像彫刻の道へ傾倒していった観音開基のはじめより、鳥居観音としての磐石の地歩を固めた今日まで、制作中の桐江の彫刻のかたわらにてよく読経し、常に仏前にて敬虔な祈りを捧げていた。

一方、夫の出向くところ常に行を共にし、御仏の国にその偉大な跡をたずねている。

全日本仏教婦人連盟理事として世界仏教徒大会をはじめ、インド仏跡巡拝には三度も同行、アラブ・地中海付近の旅やエジプト、シルクロードの旅、セイロン、インドネシアの旅にも同行し、さらに信仰を深めることを得た。

そして、彼女の熱心な協力の賜物が鳥居観音随所に見られる彼女の手になる鎌倉彫の扁額や聯であり、三蔵塔や仏像の胎内におさめられた多くの写経である。

鎌倉彫りを始めたのは、昭和二十六年、桐江のアメリカみやげにカトレアの大輪を羽田で胸につけてもらった感激のしぼまぬうちに、この花を彫って残そうと思い、鎌倉にかけつけ村主匡左師の門をたたいて弟子入りした。

今日、その成果は鳥居観音の随所に見られる。まず、本堂正面に懸かる『白雲山』の額も彼女の手によるもので、これは足利紫山禅師が百才のとき書かれたものを、彼女が彫ったものである。また、本堂内陣の左右の柱にかけられた聯一対『諸行無常是生滅法』『生滅滅已寂滅為楽』も彼女の作、大休老師の豪放な筆法がみごとに生きている。

このほか、高階龍仙禅師の揮毫になる三蔵塔『蓮華峰』額、『玉華門』額、本堂須弥壇、縁の下の柱のうち表からは見えない後の二本に施した花の彫刻など、いずれも彼女の心情がこもっている。

これらの作品にも増して、彼女の信仰心の篤さと努力のたまものともいえるのが、写経である。なかでも三蔵塔におさめられた三千仏名経、「過去」「現在」「未来」の三巻の写経は、家事のかたわら十年という驚くべき歳月と根気をかけたもので、彼女の信仰心を



「仁王門」

もってしてはじめてなし得たことであろう。このほか、各仏像の胎内におさめられた写経、仏像の光背に記された経文など、そのほとんどが彼女の手により彫られたものである。

〈地蔵堂縁起〉　（五三頁参照）

白雲山の旧道を登った中腹に、小じんまりした目立たない地蔵堂があり子育地蔵が奉安されている。これは檜の根を利用した台座とも一木彫りである。地蔵の膝に抱いている子供は桐江の孫、当時二才の宏之がモデルである。これは彼が県議会議員をしていた昭和十八年頃の作品で、空襲が激しかったので県議会がしばしば防空壕の中で行なわれた頃である。

〈仁王門〉　（一八・一九頁参照）

地蔵堂から五〇メートルほどのところに仁王門がたっていて、鳥居観音の入口らしい雰囲気になる。

寺域の守護神で阿像は口を開いて、吽像は口を閉じて二体揃ってのいわゆる阿吽の呼吸という言葉がうかがえるようである。

桐江は昭和十五年から、この仁王像の制作にとりかかっている。この間、次のような公務に携わり戦時中でもあり、完成までに十二年間を費やした。

二十七年十月盛大に落慶式が挙行された。この日、カゴに乗って登ってきた臨済宗管長峰尾大休老師が、豪放なタッチで『大玄門』と揮毫した扁額を納め、そのもとで開眼の際『喝！』と発した大音声が全山にこだまし、なみいる来会者はドギモを抜かれた。

仁王胎内には、桐江が縁起を記し、妻及び子供の写経などが鎌倉彫の経箱二つに入れられて納められた。

飯能銀行取締役会長（昭和七～一八年）
埼玉県森林組合連合会理事・会長（同一七～二三年）
埼玉県議会議員（同一八～二二年）
埼玉銀行取締役（同一八～二四年から三六年まで同行頭取）
参議院議員（同二二～二八年）
全国銀行協会連合会理事（同二五～三六年）
大日本山林会理事（同二五年～）

〈本堂建立〉　（三四・四二～四七頁参照）

自らの手による白雲山の整備が進んだのを機に、桐江が本堂の建立に着手したのは昭和二十九年のことである。この年、鳥居観音が宗教法人の認可を受けた。本堂は五年の歳月を費やして、三十三年五月完成した。

高階瓏仙禅師によって落慶法要がなされたこの本堂は、飛鳥朝建築様式に現代性を取り入れた簡潔なものとなった。設計は多田篤一による。

堂内の四囲の絵は、野生司香雪の作による、観世音の住むという補陀落迦山の物語で、彼は三ヶ月間滞在して描きつづけたのである。

中央入口のガラス扉は八ミリ厚さのガラスを二枚合わせにしたもので、幅二・七メートル、高さ二・二メートルのそこに、小川潮人の筆になる直径一・五メートルの大法輪と、四隅に梵字が描かれている。中央の部分はブロンズ製。

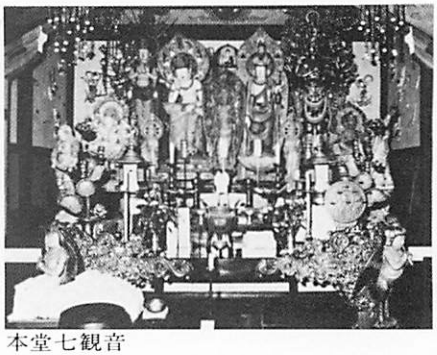
四囲の窓は六ミリ厚さのガラス二枚を合わせたもので、互井開一が色彩豊かに現代的タッチで自然、ことに山の幸、海の幸を描いたものである。

天井には四季それぞれの代表的な花々が三〇人の著名な画家によって描かれている。

また本堂正面の額、左右の側柱にある大休老師の筆による『諸行無常是生滅法』『生滅滅已寂滅為楽』の聯は、前述のごとく桐江の妻とみが彫ったものである。

このように、本堂それ自体が一つの美術品の宝庫になっているといえよう。


鳥居文庫


本堂七観音

〈本堂の仏像たち〉

以前より鳥居観音に七観音像も安置すべく長期間のスケジュールを念頭に彫刻に励んできた桐江であったが、本堂建立に併行して七観音の制作も精力的に進められていた。

昭和二十八年には如意輪観音に着手した。

制作にあたり桐江は、仏像の尊厳を傷つけない範囲で現代の感覚を生かそうと努力し、女性的円満を表わすように全て丸と陰陽をもって彩色している。現代感覚の導入という点については、桐江はその後のどの作品にも試みている。

像の胎内にはいずれの作品もそうであるが縁起が記され、写経が納められている。開眼は三十年六月、塩入亮忠大僧正によって行なわれた。

ひき続いて不空羂索観音像を制作、二年余の後に完成。光背は沢田政広、台座は村岡久作、彩色は小川潮人の協力を得る。

埼玉銀行より、本堂完成記念の寄進として沢田政広作の十一面観音を奉納された。

こうして、聖観音、如意輪観音、不空羂索観音、十一面観音の四観音像が整った。

本堂完成後の七月に五番目の馬頭観音ができあがった。頭上に馬頭をのせ、忿怒の形相をした顔が三面になっている。

この像は有馬老師によって開眼された。

二年後の三十五年五月には准胝観音が総持寺貫主、弧峰智璨禅師によって開眼された。この像も馬頭観音同様、小型である。

准胝観音は、たくさんの仏の母であり、純粋な母性愛を表わしている。観音様は中性で男女自由に彫られるが、この准胝観音だけは女性である。

桐江は、母のおもかげの美しさを思い出しながらこれを彫った。

七観音の最後として最も手のこんだ千手観音に着手したのは桐江六十六才。翌年、世の耳目を集めた武州鉄道事件であらぬ疑いから法廷で争うことになった。そんな中で彫り始めたこの観音は五年の後、四十二年に完成した。

〈本堂増築〉　（四二〜四七頁参照）

こうして桐江の独創による七観音はここに揃ったわけであるが、千手観音は大きすぎて本堂に入らず、さらに三つの観音像は本堂の畳の上に置かれている状態だったので、本堂の増築を行ない、千手観音の開眼式とともに四十二年五月落慶式が行なわれた。（導師・高階瓏仙猊下）

この落慶式は鳥居観音に一つの時代を画すような盛大なものになり、参列した信徒の数は千数百名に達した。

増築された本堂は五〇坪となり、ここに初めて七観音が一堂に揃って安置されることになった。

〈文庫設立〉　（本文、五八〜六二頁参照）

昭和三十三年完成した鳥居文庫は、三蔵塔建立の発願者でもあり、桐江とは因縁浅からぬ水野梅暁が彼の所有していた中国文献を鳥居観音に奉納したいといっていたことから、その志を継いでできたものである。

当文庫には、梅暁老師の遺品をはじめ、桐江の作品やコレクションが所蔵されている。

昭和三十五年には第二文庫が完成、白雲山を訪れる人達に公開されている。

〈玄奘三蔵塔建立〉　（三五頁参照）

大東亜戦争勃発の翌昭和十七年、日本の主兵力が中国にあった。南京の守備にあたっていた高森隆介大佐が率いる高森部隊は十一月のある日、整地作業中、



三蔵塔基壇四方にある彫刻「邪鬼」

大きな石棺を掘りあてた。

その石棺の中には玄奘三蔵法師の霊骨と三百余点の副葬品が納められていた。

この霊骨は中国政府の手で霊骨塔に納められたが、その一部が日本側に分骨されることになった。

中国から三蔵法師の霊骨を受けてきた一人である水野梅暁は、霊骨塔は日本に一ヶ所でも多く建立されることが仏教界のためによいと考え、伊豆長岡の岡部長景と平沼彌太郎に分骨した。かくして霊骨は鳥居観音に迎えられ、現在の三蔵塔建立への縁起になったのである。

霊骨を白雲山に迎えるに至る導師ともいうべき水野梅暁は、禅宗に僧籍をおいていた。また彼は中国に精通し、その知識と経験を買われて外務省の嘱託として中国外交の担い手として活躍した。

彼は寺ももたず地位も求めず中国を行脚することを一つの目標としていたので、中国体験の豊かさや中国要人との交渉は想像を超えるものがあった。

昭和六年頃、彼が病気で入院した麹町病院の主治医柳川博士が桐江の妹の夫であった関係から、病気回復の静養のため、名栗の平沼家にあずけられた。このときから平沼家と梅暁の親交が始まった。以来、全快後も彼は平沼家を我が家のようにしてしばしば訪れ、炉端でアジアの情勢や仏教のことなど、四十才になり名栗村長になる前後の桐江一家と語り合うことが多かった。

戦後の昭和二十四年、名古屋、日泰寺で営まれた仏舎利奉安五十周年大法要に、三蔵法師の霊骨を奉持して参加した梅暁はその大役を果たしおえた喜びもさめやらぬうち、慈恩寺で病に臥し、十一月鳥居観音の三蔵塔完成を見ることなく、その波乱の生涯を閉じた。

梅暁の死により、三蔵塔建立は桐江の悲願となった。

昭和三十二年の暮、ついに塔の構想は固まった。霊骨塔の模型は日、中、印の三国の仏教美術の粋を集め、中東の宗教彫刻をも参考にするなど、彼の信仰と仏教彫刻に対する考え方のオリジナリティがよくでたものである。

また、梅暁が生前、霊骨塔建立については「現在日本において、〝この人は〟といわれるような第一人者千人の賛同を得て後世にその名を残したらよいがなあ」といっていたのでこの聖業達成に各界から発起人になってもらおうと考えた。この悲願は三百名の署名と賛助者三千余という形になって達成された。

〈大観音建立〉　（一〇〜二一・二八・三九頁参照）

大観音建立の悲願はいつごろから桐江の心に芽ばえたのであろうか。それは五回にわたる聖地巡拝でその素地が固まっていたものであろう。

「高い山頂である霊地から、あまねく世間を見そなわし、偉大なる大慈大悲の威神力により衆生を済度し、この不安な世相を是正して平和な国土、万民豊楽をこい願う一途の念」から大観音建立を悲願したという。

長い人生体験をもとに近代感を取り入れての独創的な構想は、四十三年七月に設計図が引かれ、二年後の四十五年五月九日、曹洞宗管長・総持寺貫主岩本勝俊禅師を導師として迎え上棟式を行なった。

それまでに東京・江古田の桐江のアトリエでは大観音の模型（四メートル）をつくり、それを六倍に引きのばすため区切って粘土づけする作業が、一年余を要して進められた。

このような巨大なものを粘土で拡大するのは日本では初めてのことで、彫刻界でも話題となっていた。

この日本で、当時、三番目に高い救世大観音には屋上の四方に四天王を配したり、玄関両脇に徳川初期の作品を修復した仁王尊を安置したりして、インド、中


建設中の大観音脇仏(部分)


建設中の平和観音

近東の建築と日本寺院の様式を融合させるため配慮されている。

また、ステンドグラスを使用したギリシャ式玄関、中央入口のギリシャ・クレタ島に見られる逆さ柱、入口の踏み石はセイロン島の寺院にみられるムーンストーン(平沼とみ・作)の形式などがとり入れられており、救世大観音本体および内部は桐江美術の結集ということができる。

〈納経塔、平和観音建立〉

(三六・四〇～四一・五四頁参照)

桐江の観音郷づくりへの意欲は、とどまるところを知らず二年後昭和四十八年十一月には、三蔵塔と大観音の中間の面白岩に総高十五メートルの納経塔を建立した。

この納経塔は、今から二千年前、仏教が旺盛を極めたガンダーラの遺跡から掘り出されて博物館にあったものを桐江が旅行の際見て、考案したものである。

内部壇上には二頭の獅子を台座として、金箔立像の釈迦如来を安置してある。(五四頁参照)そして、大観音堂宇内の一万体観音を供養するため一万巻の「般若心経」が奉納されているが、十万巻納経をも念願されている。

一方、昭和五十年には地球愛護平和観音が落慶した。

この平和観音は車が登れない三方山に囲まれた標高五〇〇メートルの地点にあり、工事は困難をきわめた。

この高さ十五メートルの観音像を標高五〇〇メートルの高所に移すためには多くの工事従事者たちの努力と根気がいった。

しかし、今日は地球愛護の名の通り、恒久平和を願い穏やかな慈愛に満ちた表情で下界をみつめている。

●参考資料

「白雲山鳥居観音のしおり」(鳥居観音刊)

「G・R白雲郷とりい」(鳥居観音刊)

「鳥居観音と平沼彌太郎」(プレス刊)

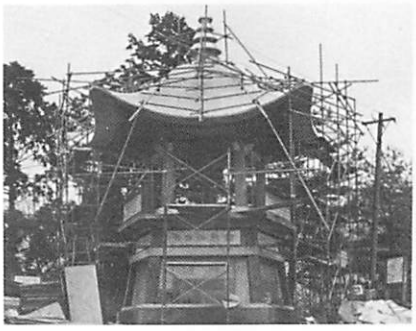
「仏像案内」(吉川弘文館刊)

「観音像」(誠信書房刊)

「仏像・イコノグラフィ」(岩波書店刊)

三十三観音、鐘楼建立

（三〇～三一・七七～七九頁参照）



建設中の鐘楼

桐江はじめ鳥居観音信者の永年の悲願であった鐘楼が、昭和五十二年五月ようやく落慶の喜びをみることになった。

この設計は、かってバリ島で見た椰子の葉で葺いた素朴な鐘楼に桐江がヒントを得たもので、他に類をみない五角形の柱と屋根からなる鐘楼で今年より除夜の鐘の響きは全山にこだまするであろう。

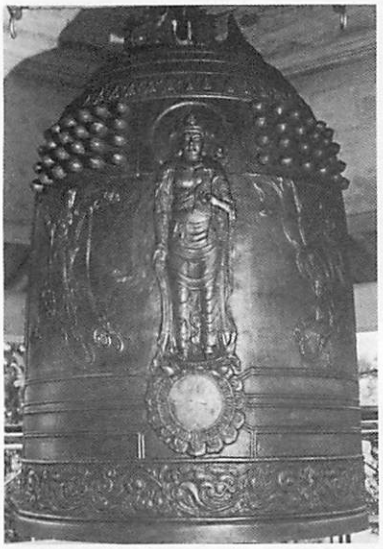
総高十一メートル　五角形　五本柱
鐘・口経　一・二メートル　高さ一・七メートル

さらに理想の観音郷づくりに疲れをみせない桐江は、続いて、三十三観音の制作に打ち込んでいる。

この三十三観音というのは、妙法蓮華経普門品に説かれた三十三応現身、即ち仏身、バラモン身、比丘、比丘尼身等々、あらゆる必要に応じた姿で、この世に現われ吾々を救って下さるという三十三の例にもとずくものである。

桐江は、現在迄に三十体の三十三観音（石膏・原型）を制作し、そのうち十四体の（ブロンズ製）観音が完成している。

ここには前述に一部掲載してある三十三観音以外のブロンズ製・完成像および現在制作中の石膏原型、粘土原型、原図を掲載した。（総高各〇・八m前後、現在制作中）





遊戯観音（ブロンズ像）



円光観音（ブロンズ像）



持経観音（石膏原型）



龍頭観音（ブロンズ像）



楊柳観音（ブロンズ像）



魚藍観音（ブロンズ像）



施楽観音（ブロンズ像）



滝見観音（ブロンズ像）



蓮臥観音（ブロンズ像）



白衣観音（ブロンズ像）



威徳観音（ブロンズ像）



青頸観音（ブロンズ像）



一葉観音（ブロンズ像）



水月観音（ブロンズ像）



徳王観音（ブロンズ像）



阿耨尊観音（石膏原型）



能静観音（石膏原型）



岩戸観音（石膏原型）



衆宝観音（石膏原型）



延命観音（石膏原型）



蛤蜊観音（石膏原型）



多羅尊観音（石膏原型）



瑠璃観音（石膏原型）



葉衣観音（石膏原型）



阿麼提観音（石膏原型）



一如観音（原図）



合掌観音（石膏原型）



馬郎婦観音（石膏原型）



普悲観音（石膏原型）



六時観音（石膏原型）



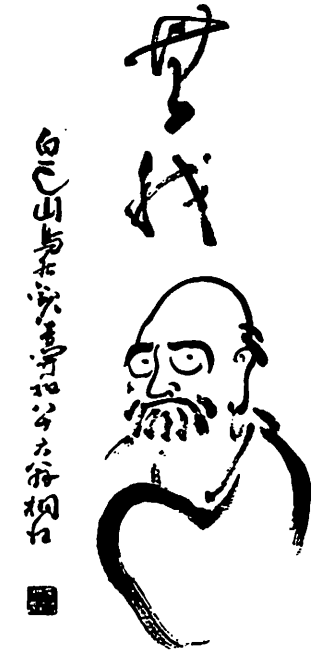
灑水観音（石膏原型）



持蓮観音（原図）



不二観音（粘土原型）



平沼桐江居士夫妻作品集

昭和五十二年五月十四日発行
平成二年十一月十七日　再版

著作者　平沼桐江・とみ

発行者・発行所
白雲山　鳥　居　観　音
埼玉県入間郡名栗村
電話　〇四二九―七九―〇四一七